598
11

0054743000

0054743-000

598－11

民俗芸術叢書

地平社書房

第４巻

昭和４

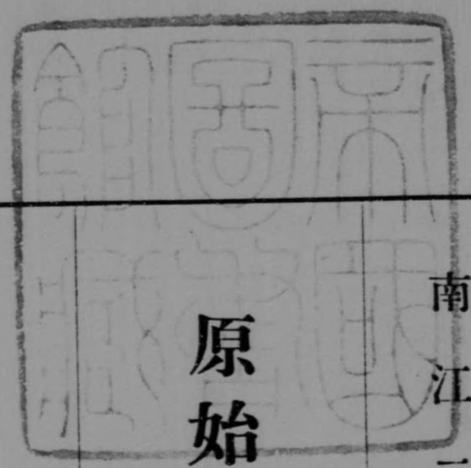
AID

36.3.24

原始民俗假面考

南江二郎著

地平社書房刊



南江二郎著

原始民俗假面考

地平社書房刊行

598-11

序

私は遲々として進まぬながらも既刊の拙著「人形劇の研究」の訂正補充のかたはら、その姉妹篇として「演劇假面・隈取の研究」をしてゐる。かうした研究にはその一大源泉とも云ふべき原始的民俗假面・隈取の研究が必要である。然るに私の知る限りに於いては、かうした範圍を限られた研究・考證は獨逸を除いては各國に於いて非常に少ない。日本に於いて一冊の書物としてまとまつたのはこの拙著が初めてでないかと思ふ。それだけに、私のやうな未熟な者がそれに先鞭をつける事は、むしろさし控へるべきであつたかも知れない。然し私はこの「原始民俗假面考」を執筆する事が、單に「演劇假面・隈取の研究」に重要な參考となるばかりでなく、もつと廣く深く、舞踊・演劇・人形芝居等の研究の爲にも、非常に必要な事を感じて、先づ自分自身の勉強研究の爲に一冊にまと

めた次第である。

この第一章は「原始民俗假面概論」である。私はその初めに「原始民俗假面とは、未開野蠻の民族に生じたる民間傳承（フォーク・ロア）の發生進化に伴ひ、その心理表現の一具象物として、おのづから作られたる最も原始的なる假面を總稱するもので ある」と述べてゐる。從つて私は一通り、諸家の「民俗學」「人類學」を一讀し、その代表的學說に原始的假面を關聯させて概論したものである。

第二章に於いて私はこの假面の各種を、出來得る限り古今東西にもとめて、それを大略十二項に分つて考査した。この記述に於いて私が單に假面考にとどめず、私の知り得た限りに於いて、それに必ず伴ふ儀式、舞踊等の意義、樣相、表現方法、風俗、等に就ても附記したのは、粗雜なものながら舞踊演劇研究家にも一つの參考資料を提供したかつたからである。

勿論、淺學未熟に加へて、實地見聞、見學に乏しい私のこの著作は多くの缺點を持つであらう。それ等は讀者諸氏の叱正と今後の研究に依つて、訂正して

ゆきたいと願つてゐる。尙、この假面考に於いて、我國のものが非常に少ないのは、この叢書風な限定された紙數を尊んで、資料の手に入り易い我國のものよりも、諸外國のものを出來るだけ多く紹介して、讀者諸氏の自らの研究と對照して貰ひたい考へに依る事を、一言ことわつておく。

昭和四年六月

著者

目次

第一章　原始民俗假面概論……（一）

第一項　序說・原始民俗假面とは何か……（三）

第二項　民間傳承に現はれたる信仰……（五）

第三項　假面の始源及び使用の意義……（一九）

第二章　各種原始民俗假面考……（二九）

第一項　狩獵假面……（三〇）

第二項　トーテム面假……（三八）

第三項　妖魔假面……（五三）
第四項　鑒術假面……（六〇）
第五項　追悼假面……（七〇）
第六項　頭蓋假面……（七八）
第七項　靈的假面……（八三）
第八項　戰爭假面……（八八）
第九項　入會假面……（九四）
第十項　雨乞假面……（一〇四）
第十一項　謝肉祭假面……（一〇八）
第十二項　其他の假面……（一一三）

挿入寫眞●目次

一、イヴォリー・コーストからの狩獵假面……（三一）
二、同地のゴリラ・トーテム假面……（三九）
三、セネカの模擬祕密結社の妖魔假面……（五三）
四、ブルマの癲病用鑒術假面……（六一）
五、トーテム・ポールに似た追悼假面……（七一）
六、古代メキシコの頭蓋假面……（七九）
七、ニュー・ブリテンの象徴的靈的假面……（八三）
八、英領コロンビア土人の軍事的舞踊假面……（八九）

九、ニュー・ギニアの成年式用妖魔假面……（九五）
十、ズーニー族の雨乞假面……（一〇五）
十一、アルプス山麓等にある謝肉祭假面……（一〇九）
十二、北太平洋土人のトーテム的神靈假面……（一一三）

凸版插畫・目次

一、濠州トーレス海峽植民地の鋸鮫踊……（三〇）
二、埃及の動物神假面舞踊……（三八）
三、アフリカの惡靈退散用假面……（五三）
四、ニュー・メキシコの袋狀竪術假面……（六〇）
五、ニュー・ギニアの精靈假面……（七〇）
六、メキシコのモザイク頭蓋假面……（七八）
七、メキシコの精靈假面をつけた偶像……（八三）
八、メラネシヤの原始戰爭假面……（八八）
九、英領コロンビアの雷鳥假面……（九四）
十、ズーニー族の降雨神……（一〇四）
十一、中世紀カルニーヴアル酒宴假面……（一〇八）
十二、アラスカの鷲の舞踊……（一一三）

口繪

（ビスマルク群島に於ける、ドツク・ドツク秘密結社の入會假面舞踊の圖）

原始民俗假面考

第一章　原始民俗假面概論

第一項　原始民俗假面とは何か

この著述で稱する「原始民俗假面」とは如何なるものを指示するか。

英國の民俗學協會（フオークロア・ソサイテー）公刊のバーン女史編の「民俗學概論」の中に於いて、「民俗學」なる語は、文化低き民族乃至開化民族中の朦昧なる人民の間に保留されてゐる傳統的信仰・慣習・說話等の研究考査の總括汎稱とされてゐる。卽ち無生・有生の自然界、人間の性質及び人間の作つた事物、靈界及び此れと人間との關係、妖巫術、呪文、緣起、豫兆、疾病、死、等々に關する、總て是等の未開且野蠻なる信仰、又、祭禮、戰爭、狩獵、漁撈、牧畜、其他彼等の生活行事に於ける慣習、更に又、神話、傳說、民譚、歌謠、諺、等の考査を包括するものである。換言すれば、彼等民間の心的方面の裝備をなす凡ての事項を包含する民間傳承の考

査である。

「原始民俗假面」とは、この未開・野蠻の民族に生じたる民間傳承（フォーク・ロア）の發生進化に伴ひ、その心理表現の一具象物として、おのづから作られたる最も原始的なる假面を總稱するものである。從つて是等の原始的假面の始源、由來、使用の意義等を知る爲には、それ等の民間傳承の發生進化の跡をたづね、それに伴ひて假面の生じたる動機、用途、等を研究考査する事に依つて、おのづから明白となるであらう。故に以下の各項目に亙つて先づこれを論述する。

(1) Burne. C. S. The Handbook of Folk-Lore (1914)

第二項　民間傳承に現はれたる信仰

原始民俗假面の發生に際して、先づ第一に主なる動機ともなり、重要なる原因ともなつたものは、信仰であり、その宗教的儀式である。故に先づ彼等上古の民族が持ち、今も尙未開の原始的民族が持續してゐる、彼等の信仰に就て考察しなければならない。

人類早期の文化の進歩徐々たる時代に於いて、あらゆる自然現象が彼等土民の苦樂の原因たる事を彼等に痛感させた時、マレット博士の所謂有生觀（アニマチズム）（Animatism）(1)は、一歩を進めてタイラア卿の有靈觀（アニミズム）（Animism）(2)となつた。卽ち同教授が「原始文化（プリミチブ・カルチユア）」で細述した如く、彼等土民が、暑熱と冷寒、氷雪と風雨に身を曝らし、時には波浪に弄ばれながら、常に生活資料と安息所を求めて、海に

山野に漂泊しなければならなかつた時、彼等の微力ではどうしても統制する事の出來ない偉大なる力をもつて、季節の變化をもたらし、時には溫かく靜かに彼等を慰め、或時は又狂暴に人間を虐げる、是等の天體、風雨、流水、波浪等に對して、彼等が精靈の存在を認めようとした事は疑ふべき餘地がない。同時に彼等が山野岩石等に對しても、神祕な力と生命とを賦與しなければならなかつた事も想像に難くない。こゝに彼等上古原始民族の自然に遍在する靈的存在に對する信仰が發生する。

人類はまた其の厥初から、食物、飲料、住居建築材料、被服等を、動物、植物、樹木等に仰がねばならなかつた。腐朽し易い植物性の物質に反して、動物性の物質は先づ人類に多くの生活資料を與へた爲に、舊石器時代には既に狩獵に動物飼養を含ませた人類と動物との共存時代を現出せしめてゐる[3][4]。續いて新石器時代には野生の植物中から、小麥、燕麥、裸麥、稻などを栽培するに至つたことをバァキットは說いてゐる[4]。然しかくの如き人類と生物との共棲に於いて、人類は屢々是等の生物に脅かされねばならなかつた。狂暴巨大な野獸は幾度となく彼等土民を襲つたであらう。生きる爲に食物として又は飲料として求めた動物植物の有毒性は、その結果に依つて有害無害を自然に識別し得るまでに、彼等の仲間の生命を幾人となく奪つたであらう。更に强く切實に彼等を戰慄させたものは、飼養動物の病死・頓死であり、植物の枯死等である。勿論、是等の動物・植物の如き、人類と共棲的關係にある生物は、彼等土民の生活に最も直接な影響を及ぼすものである。それ故に、是等は彼等が前記の天體、風雨、岩水等に對した時よりも、より深い尊敬・恐怖の對象となつたであらう。この人類の生存上乃至生活上、切實にして實際的なる必要感と、往々生ずる呪はしき現象に依る恐怖感との混同せる神祕感を、彼等上古民族は如何に處理していつたであらうか。それに就ては第三項に於いて考察するとして、彼等原始的民族

の信仰をより詳考する爲に先づジャッド教授の説く如き生命連續觀の認識から考へたい(5)。卽ち、人類の生命は彼等に生活材料を與へる動植物のみならず、それ等の生物に生存材料を與へる一切の無機物とも離す事の出來ない關係にあると云ふ生命連續觀の認識である。この認識は上古の土人をして、生物としての動物・植物は云ふまでもなく、其他一切の自然物と彼等とを同一血屬として信じしめるに充分である。同時に、この同一血屬にある自然界の一員であり、生物界の一單位である人類が、生命を持ち、精靈を具有する事を認識する以上、動物・植物・其他一切の自然物に生命・精靈の存在を認識する事も、むしろ當然の事であらう。

是等の認識が、生命のあらゆる形態及び顯現の、本質的一致觀はもとより、相互變置の可能性、相互依存等に關する觀念を創り、是等の觀念を根源として、民間傳承としての、人類と其他の生物、自然界の事物・現象との關係を結ぶ、あらゆる信仰と行爲、慣習、說話等を創造したのである。私達はその證明を各國の人類學者、民俗學者の實地見聞考査の報告紹介に依つて、數限りなく指示し得るのである。例へば、私達は其處に山巓、河泉に棲む超人間的存在に關する信仰を見る。あらゆる天體に對する尊拜と神格化を見出す。我國の民間では桑林には落雷しないものと信じられて來たが、この樹木・植物の持つ超自然的な呪術力に對する信仰は、もとより日本ばかりでなく、フランス・ドイツ等の國々にも行はれてゐる。卽ち彼等はその同じ目的の爲に石蓮華を屋根の上に置くのである。又、ニュー・ギニアのコイタ部落等で用ひられてゐる「壽石」と同樣に、樹木や植物の神祕力は、その接觸に依つて他の物體と交感する事が出來るものと思はれてゐる。例へばウェストファリア地方では、樹液が樺や楡の木に成る如く、木の葉が樫の木に寄生してゐるが如く、若い牛の乳腺に乳が滿ちるやうに、或る唱詞を誦じて祈りながら、山枴の小枝或は若木を、夏中牛小屋又は乾草堆

の上に置くのである。この山枠はスコットランドとシュロップシャイアでも邪術除けとして使用されて居て、是等の樹棒でたゝかれた動物は繁殖するが、若し柳でたゝくと内部的苦痛に襲はれるであらうと信じられてゐる。又、或る樹木を伐り倒すと樹木は出血して泣き始めると思ふアニミズム的信仰の進化した例證としてはベルガルの樵夫の慣習がある。彼等は木材を伐りに藪林へ行く時、一人の行者を伴ひ、儀式を執行し、藪林の神々に供物を獻げさせるのが常である。又、聖樹崇拜は東部ロシアのヴォチャーク人が持つ聖森を初めとして、各國に於いて見出し得るものである。より神話的なるものとしては、人間が樹木に化成する話とか、人類、家族、或は個人の祖先は樹木から出たと信じるものがある。是等の觀念は動物と人間との關係に於いても類似して現はれてゐるが、それは植物のフォーク・ロアよりもより深刻である。卽ちアメリカ部族の傳說に於いては、動物は世界創成及び人間的需要に應ずる適合物創製の作因であり、

且つ或程度に於いて彼等民族の文化英雄（カルチユル・ヘロス）となつて居り、「助けをする動物（ヘルプフルアニマル）」としての民譚は歐洲に普遍してゐる。この思想の進化より生れたものが有名な社會宗教的組織の一種としてのトーテミズムの信仰である（第二章・トオテム假面考參照）。

私達は次に、未開原始人がその周圍の事物に對して抱く諸觀念に基く信仰の考察から轉じて、彼等自身卽ち人間個々の關係に於いて、如何なる觀念を有し、如何なる信仰を持つかを考察しなければならない。彼等低級文化の土人間では今も尙、特殊な人間には特殊な呪術的性質があり、或は身體の特殊な部分にもその力が宿つてゐると考へられてゐる。又、彼等のうちの相異る人々の間の合同、相互的結合は、血を混合する事に依つて、或は食物を頒つ事に依つて作られ、その食物の性質は食べた人に傳染し、或は其の人の性質となると想像され、更に呪術力はその吉凶の如何を問はず、接觸、呼吸、唾液、或は眼の一瞥に依つても傳通され得ると思はれ、人の名は其の全人格として取扱はれ、（例へばア

イヌ族では、妻は夫の名前を云つてはならない。それは彼を殺すも同樣で、確かにそれは彼の生命を奪ふであらうと云はれてゐる。)影像、反映、肖像、偶像に對しても同樣の信念が適用されてゐる(6)(7)各例證參照)。之等の諸觀念の存在は前述の彼等の周圍の事物に對して抱く諸觀念と全く類似合同するもので、私達はこれを最も自然な現象として認め得るであらう。

この觀念を一歩進める時、彼等はフレーザー博士の諸引例の如く人間を神に高揚させ、終にその觀念を基礎として禁忌(タブー)制度を成立させたのである(8)(9)。ポリネシアに於いてこの神聖の神祕的性質は、治癒的でなく、傷害的であり、崇敬感を起さずして畏怖感を起させるものとされてゐる(7)。卽ち彼等の酋長、祭司に內在する神聖は、非常に力あるものと考へられてゐて、彼及び彼の所有物、又は彼が曾て觸れたことのある事物に接觸することは危險であるとされてゐる。然しタブーは斯の如く不淨で危險な、畏怖すべきものと思ふ反面、宗敎的に淨化されたものと思ふ二樣の觀念を持つてゐる。このタブーに就てヴントは明確な定義を下してゐる。卽ち「タブーとは、原始人の魔の威力に就ての信仰の表白であり、進化である。後には其の根源から分離したけれども、一種の心理的固執性により、單純にある力として存在を續け、其の態樣に於いて習慣と法律の根柢となるに至つたものである。」と(10)。フロイドはその著作「トーテムとタブー」(11)に於いて、このヴントの論說及び人類學者トーマスに依つて起草せられた大英百科辭典中のタブー論考を引用し、如何なる目的に依つてタブー制度が成立したかを次の如く圖表的に列記してゐる。

「一、直接のタブーは次の如きものを目的とする。

(a) 酋長祭司等重要なる人、及び物を災害に對して保護すること。

(b) 酋長祭司の如きものゝ、强力なるマナ(魔術的力)に對して弱者——卽ち婦女子及び一般通常人——を安全にすること。

(c) 一定の食物を攝り、又は死屍と接觸すること等に依つて起る危險に對する保護。

(d) 人生の主要なる行爲——卽ち出産、青年入門、結婚、性的機能——を其の妨害に對して安全ならしめること。

(e) 諸神、諸靈の怒り、其の力等に對して人間を守護すること。

(f) 一定の行爲をなし、或は一定の食物を攝り、それが爲に子供に特別の性質を傳へて格別に兩親と同情關係に立つに至れる胎兒、幼兒を種々の危險に對して安固ならしめる爲等。

二、タブーは、ある個人の財産、卽ち其の田野、其の器具等を盜賊に對して安全にする爲に設定せられることがある。」(吉岡永美氏譯)

ともあれ、是等のタブー發生の根源となつたものは、物體に籠ると思惟せられた魔の威力に對する恐怖・神聖化的信仰であつて、タブーはその客觀化され、後に功利的に適用されたものに過ぎない。是等の觀念に基く變形的信仰は又、彼等原始人の製作物の上に見出される。卽ち彼等の日用品の或物は豫兆を與へる能力を有するものとして信じられる。小刀が落ちること、指輪が壞れること、家具が軋り鳴ること、等々は總て彼等にとつて何かの前兆である。又彼等の製作物の多くはアニミスティクな、或は少くともアニマティスティクな信仰のもとに多くの迷信を持つてゐる。更に又それ等の製作行爲、又は物質を變形さす事は、それ自身彼等には一種の神祕であつたであらう。それに何等かの化學的過程が含まれてゐた場合には、殊にさうである。例へば醱酵の過程は驚異と讃嘆を喚起させ、發火の技術は驚異と宗教的畏怖とを喚び起させるに充分であつたであらう。

最後に肉體から獨立に生存する別個の一實在としての彼等の靈魂に對する信仰が、文化の程度の極めて低い民族にも行はれてゐる事に就て考察しなければ

ならない。卽ち彼等原始人は人間は靈魂を持つて居り、其靈は自分の住家なる肉體から拔け出て他の人間にはいり込むことが出來、此靈魂に依つて種々な心靈的活動を起し得るもので、靈魂は或程度まで肉體とは獨立したものであると信じてゐたのである。これは明らかに亡靈、幽靈、等の信仰、及び前世と來世との信仰の根柢をなすものである。同樣に惡魔祓ともなり、祖先崇拜ともなるものである。是等の靈魂は最初、個人と極く似通つた實在として考へられてゐた。然しその後の久しい進化に依つて、靈魂は形態的性質を失ひ、「心靈化」と云ふ高い地位にまで到達したのである。

フロイドの云ふ如く、多くの論者は、「此靈魂說が萬有精神論的體系の最初の中核であり、又心靈は單にかの既に形體から獨立した後の靈魂に對應するものであり、更に又動植物及び物體の靈魂は人間の靈魂に似せて構成せられたものである。」と假定する。私もまたこの假定に心を傾けるものである。其處には先づ人類が第一期に具有した思想體系乃至大宇宙觀とも云ふべき、萬有精神論的(神話的)宇宙觀がある。この萬有精神論それ自體は未だ宗教と云ひ得ないかも知れない。然しこれが次に創生された宗教的宇宙觀の前提と云ふ事は出來る。故に原始的民族の全宇宙觀は、萬有精神論的(神話的)宇宙觀と初期宗教的宇宙觀を含有してゐると云ひ得るであらう。從つて、この宇宙觀より生じたる信仰が、原始的民族の民間傳承に含む信仰の總てゞあると云ひ得るのである。

(1) R. R. Marett. The Threshold of Religion.
(2) E. B. Tylor. Primitive Culture.
(3) W. L. H. Duckworth. Prehistoric Man.
(4) M. C. Burkitt. Prehistory, Plate ix—xv.
(5) J. W. Judd. The Coming of Evolution.
(6) E. B. Tylor. Early History of Mankind.
(7) C. S. Burne. The Handbook of Folk-Lore.
(8) J. G. Frazar. Lectures on the Early History of the Kinship.

(9) J. G. Frazer. The Golden Bough, A Study in Magic & Religion.
(10) Völkerpsychologie, II. Bd, Mythus und Religion.
(11) Freud. Totem und Tabu.

第三項　假面の始源及び使用の意義

前項に於いて、原始的民族の全宇宙觀には、萬有精神論的(神話的)宇宙觀と初期宗教的宇宙觀が含有してゐる事、從つてこの宇宙觀より生じたる信仰(主として迷信的なるもの)が、原始的民族の民間傳承に含む信仰の總てゞあると述べた。これは恐らく最も系統的であり、又最も包括的であり、且又宇宙の本體を剩すところなく說明する所の宇宙觀である。然しこれに依つて彼等原始人を往往脅かすあらゆる呪はしき事象が一掃されたわけではない。故に彼等に殘された問題は、その共棲生活に於ける人間相互及び人類以外のそれ等との關係をより良好に保持してゆく事にある。卽ちトムソン敎授の「生活網(ウエブ・オブ・ライフ)」(1)のよりよき擴大への努力が必要とされる。彼等原始的民族はそれを如何して行つたか。

彼等原始的諸民族は自然界の諸現象の生成原因の凡てをば、二樣の心靈的實在卽ち善靈と惡靈に歸した。同樣に、晝に動物及び植物のみならず無生物に對してもこの善靈・惡靈の存在を認めた。之等の靈魂は出入して、出たまゝ歸らなければ死に、歸れば活き返り、惡靈が入れば病氣となり、善靈が入つて惡靈を退散させれば健康になると考へられてゐた。この「精靈の出入」(デバアチュア・エンド・リタアン・オブ・ソオル)[2]の認識はおのづから呪術技法の發生進化を作つた。呪師、民間醫師としての一個の破妖術師及び彼等の力を借らんとする人々の主なる目的は、自然力に對し、諸精靈に對し、疾病、敵、泥坊、愛人、餌食用動物、狩獵獸類、等々に對して、是等を自由に左右せんとするにある。卽ち呪術は彼等の生存上の必要として、最も廣く深く、實際的な、功利的な目的、卽ち生活本能、生活感情、生きんとする意志、生命を保存せんとする本能等に依つて行はれたものである。故にその呪術技法は次代の原始的宗教的祭祀祈禱の前提と云ひ得る。リユウバ教授は

「生命愛、生存慾は、人間のあらゆる行爲の根源であつて、宗教だけの根源でない」と言つた[3]。然し私は總ての呪術は神聖に反對するものとして宗教と全然區別して考へる事は出來ない。アーニスト・クローレイ氏の「原始の形の宗教と呪術とを分離することは不可能であるやうに思はれる」と云ふフレーザー教授に反對した主張を一應は是認したい[4]。要するに宗教と呪術の差別は、ハートランドが結論せる如く、前者はその目的や傾向が(少くとも理想的には)社會的なもの、換言すれば、道德的なるものであるに反して、後者は個人本位の目的を達せむとするものである[5]。又前記精靈はいくつもあつて、人間もそれを多數に具有するほど、利發であり、健康であり、優秀であると考へられた。是等の思想から生れ、彼等の慣習的社會制度の進展に依り、社會宗教的組織として現はれたものが、トーテミズムであり、このトーテム動物を狩殺する事を信仰的に禁じた不文律から、漸次あらゆる事物に及ぼして作られた禁忌がタブーである。

さて、原始的民俗假面の始源と使用の意義等を知る爲には、先づこの呪術乃至アニミスチック宗教が如何にして「儀式化」されたかに就て考察しなければならない。なせならば原始的假面は是等の「儀式」に於いて最も多く使用されるからである。

原始的民族間に於いて、呪術技法又はアニミスチック宗教の儀式を支配し得る技法と力を有する偉人は、内在的呪術性能の廣汎なる信仰に基き、彼等のうちで何者よりも、最も偉大なる又は最大量の個性力を先天的にか又は後天的にか有する人物、最も力ある精靈或は諸力を壓服し得る人物、最も效力ある儀式や呪文を知悉してゐる人物であると信じられてゐる。故に彼等は祝福乃至呪詛を主として此呪術者及びその力に借りるのである。然るにこの呪術者は何によつてそれを爲すか。それは原始的民族の具有する内在的呪術性能に對する信仰の利用である。原始的諸民族は凡べての宇宙の事物は、内在的呪術性能とも云

ふべき、この神祕的性質をいくらかでも賦與されてゐないものはないと信じ、聲音、言葉、身振り、動作、過程、場所、時、數、形態、色彩、香氣、等はすべていくらかの呪力を具有してゐると信じてゐる。卽ちこの呪力及び呪力に對する信仰を、呪術技法に利用したのである。從つて呪術師は場所を選び、時を選び、或時は叫び祈り、踊り謠ひ、身振りをする。同時にその過程を尊重する。こゝに原始的宗教儀式の發生根源がある。又、是等の儀式に殆んど必然的な關係を有するものとしての原始的宗教的呪術的舞踊の存在する理由は、是等の感情、情緒を表現し、强調する方法として、更に又、動作それ自體が創生して來る呪力をより效果的に增長させる方法として、舞踊ほど普遍的にして必然的、自然的なるものはなかつたからである。故にこれを逆說的に換言すれば、こゝに原始的舞踊の發展進化を增成させた一大根源があると云ひ得るであらう。

こゝに到つて、ではなせ、是等の呪術的乃至宗教的儀式に於いて、假面が使

用されたかを考察しなければならない。

原始的低級民族間では、觀念は自らを具形せねばならぬ故に、靈魂も屢々具形物として考へられてゐる。卽ち彼等の信仰の對象となるものは、人格化された自然物であらうと、動物、鳥類、樹木、又は單に力ある不可見的存在としての超人であらうと、その如何を問はず、特に「靈的なる（スピリチユアル）」ものとして、卽ちエーテル的な、非物質的な、心理的なものとして考へられることは殆んどないのである。從つて彼等はその或ものは、人間的——でなければおそらく動物的——の身體的形態、及び人間的五感々情を有し、それ等の力は普通人のそれに超越してゐるけれども、呪術師の力には劣ると考へてゐる。呪術的宗教的儀式に於いて、この觀念を客觀的に具象化して示す爲には、假裝が必要となる。なせならばケンネス・マックゴウワンも論述せる如く(6)、神々は勿論のこと、墓から出て來た精靈は村民の姿をすべきでない。ニューギニアに於いてすら、死人を呼び起さうとする時には假面を着けねばならないからである。トーテム動物等の具象化に於いても同樣である。こゝにおのづからなる假面發生の始源がある。

人間の顏面表情はその素面にほどこされる扮裝に依つて或程度まで假裝する事が出來る。それ故に原始的民族間に於いても前述の要求に依つて屢々隈取的顏面扮裝が行はれてゐる。然しそれ等はその表情表現に際して次の如き種々なる制限をうける事は事實である。卽ち例へば、

(1) 人類と人類以外の生物との自然的相違に基く制限
(2) 身體構造、年齡、性格、性別、人種別等に基く制限
(3) 空想上の假構物、例へば鬼とか幽靈とか、妖魔など云ふ超人間的なものの表情を充分に表現し得ない制限

等々がある。然るに假面に於いては、全くこの種々なる制限から自由に解放されてゐるのである。それ故に原始的假面は必然的要求に依つて發生した事を讀

者は了解されるであらう。同時に、こゝにも形態、色彩、等が具有すると信じられてゐる呪力及びその呪力に對する信仰の利用が併用されてゐる事を了解されるであらう。

以上の考察に於いて、私は原始的假面の始源及び使用の意義を、呪術乃至アニミスチック宗教の信仰を主とする「儀式」の中に求めた。然し民間傳承に於ける「儀式」はこれ以外に慣習としての諸儀式乃至儀式的なるもの（勿論、これにも總て呪術的宗教的信仰が含むでゐるが）を持つてゐる。原始的假面はこの慣習としての諸儀式に於いても屢々使用される。故に私達はその考察に移らねばならない。

民間傳承に於ける慣習は、社會的及び政治的制度、及び個人生活に於ける諸制度を含むでゐる。是等の民間傳承に於ける制度は、その信仰や說話と同樣に、環境に依つて條件付けられた人間心態の產物である。故に前述の如く、萬有精神的（神話的）宇宙觀乃至初期宗教的宇宙觀を有する原始的民族が、是等の各々の制度に、トーテミズムに於ける明確な一例證の如く、常に彼等の信仰を結びつける事はむしろ當然すぎる事であらう。

制度はその成生と共に何等かの方法に依つて保守されなければならない。其處にこの枠組に屬する個人相互の契約が必要となる。こゝに「儀式」の發生が要求される。なぜならば文字等を有しない原始的民族の間にあつては、立會人等の前で執行される「儀式」が、重大な取引の實行を保證する唯一の方法であるからである。斯の如き要求に基いて社會的乃至政治的制度としてのトーテミズム又は祕密結社への入會儀式等が生れ、個人生活に於ける誕生、成年加入、婚姻、死亡等に關する諸儀式が發生したものである。

以上の考察に依つて讀者は原始的民族間に行はれる「儀式」は、功利的と呪術＝宗教的との二樣相を有し、一つは社會に關し、他は個人に係る事を了解され

たであらう。同時に、如何なる場合に於いても、幾分なりとも、呪術的宗教的様相が含有される以上、その「儀式」に原始的假面が屢々使用される事に就ても、おのづから了解されたであらう。こゝに原始的假面の始源及び使用の意義がある。

尙、私は民間傳承に於ける生業と工業、曆、齋日及び祭禮、競技、運動及び遊戯等に論究し、それ等に使用される原始的假面に就て考察する事の必要を感ずる。然しこゝでは論述の重複を避け、足らざるところは第二章各種原始民俗假面考の各項目に亙つて補ふ事として、この項目の論述を終る。

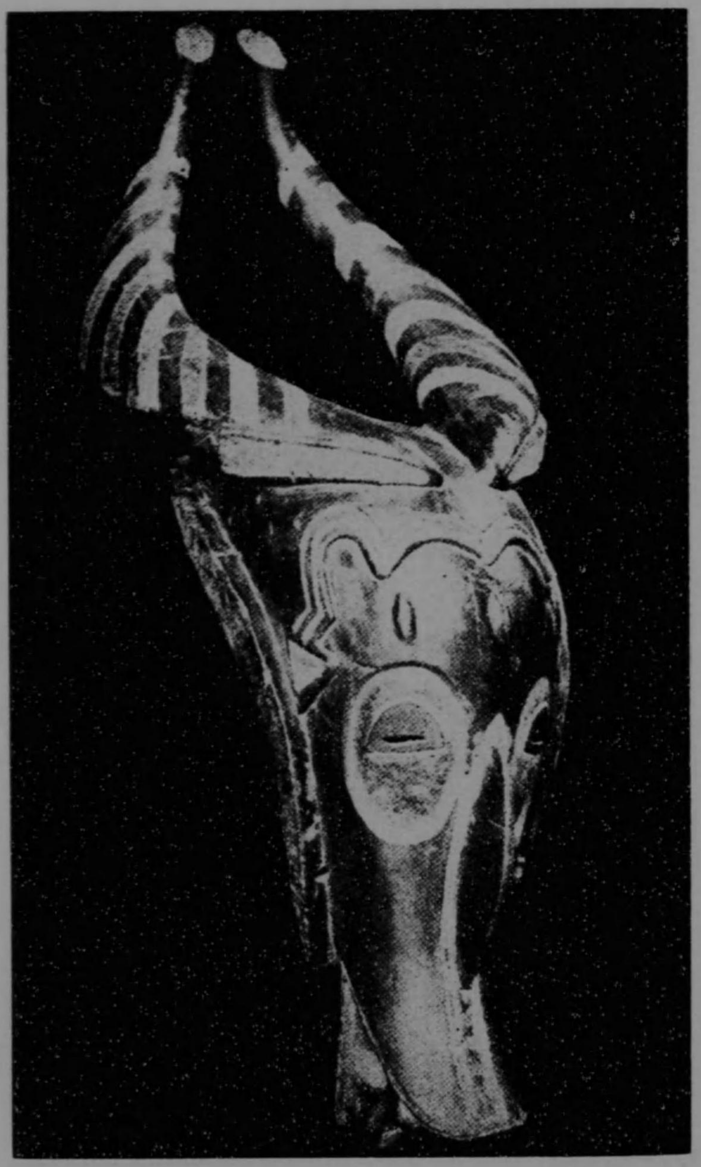
(1) J. A. Thomson. What is Man ?
(2) E. B. Tylor. Primitive Culture.
(3) Leuba. A Pschological Study.
(4) Crawley. The Tree of Life ; The Study of Religion.
(5) E. S. Hartland. The Relation of Religion and Magic.
(6) K. Macgowan. Masks and Demons.

第二章　各種原始民俗假面考

第一項　狩獵假面

——Hunting Masks.——

原始土人の假面も、初演舞臺の假面も、總ての假面（マスク）は、顏面表情の描寫である。然し、何處の國でも、極く濫觴（はじめ）の頃の總ての假面舞戲には動物の假面がある。人間は初め獵人として立つたのだ。彼等の最初の仕事は如何にして獲物に近附くか、或は如何にして獲物を彼の側へ近附けるかであつた。森や林では比較的それがたやすく出來た。然し平原や氷原の無情な公開場では、囮（おとり）を作るか、でなければ假裝をしなければならなかつた。若し彼が海豹を探求するエスキモー人なら、彼は毛皮の衣裳と角立つた頭巾をかむつて、彼の捕獲物の動きを不器用に眞似な



がら、ペタリ〳〵と跪いて歩くのだ。若し彼がインデアンなら、背後に水牛の皮を引きかけ、膝で這ひながら牡犢のやうに啼くのだ。眞似と假裝がこゝに濫觴る。それは假面する事の踏石でもある。

勿論あまりに原始的な民族は假面を作る事が出來ない。例へばオーストラリアの測り知れない蠻地の土人は假面を彫刻もしなければ、動物の頭さへ用ひない。彼等の言葉は全く不完全で粗雜を極める爲に、相互に手眞似身振りをしないでは了解する事が出來ない。從つて彼等は暗がりで話をする事が出來ない。然し彼等も既におのづから有靈觀的信仰を持つてゐて、凡ての物に靈を見出し、或目的の爲にその靈に魔法を行ひ、自分の慾望をその靈に知らす爲に長い表象的な演戲を行ふのである。卽ち若し彼等土人がカンガルーや其他、食卓に供へられる何でもの缺乏の恐れがある時、之等のものが捕へられ殺されに來るやうに祈る幼稚な演戲をやる。是等が少しく進化した時、其處に狩獵に關して行は

がら、ペタリ〳〵と跪いて歩くのだ。若し彼がインデアンなら、背後に水牛の皮を引きかけ、膝で這ひながら牡犢のやうに啼くのだ。眞似と假裝がこゝに濫觴する。それは假面する事の踏石でもある。

勿論あまりに原始的な民族は假面を作る事が出來ない。例へばオーストラリアの測り知れない蠻地の土人は假面を彫刻もしなければ、動物の頭さへ用ひない。彼等の言葉は全く不完全で粗雜を極める爲に、相互に手眞似身振りをしないでは了解する事が出來ない。從つて彼等は暗がりで話をする事が出來ない。然し彼等も既におのづから有靈觀（アニミズム）的信仰を持つてゐて、凡ての物に靈を見出し、或目的の爲にその靈に魔法を行ひ、自分の慾望をその靈に知らす爲に長い表象的な演戲を行ふのである。卽ち若し彼等土人がカンガルーや其他、食卓に供へられる何でもの缺乏の恐れがある時、之等のものが捕へられ殺されに來るやうに祈る幼稚な演戲をやる。是等が少しく進化した時、其處に狩獵に關して行は

れる嚴肅な呪術的宗教的舞踊乃至儀式的演戲が發生するのである。

マンダンインデアンの「野牛舞踊（ダンスド・ブッファロー）」がそれである。彼等は狩獵に出かける時、野牛の皮を被り、曾て野牛の頭蓋骨のあつたところに彼の頭を入れ、敵に向つて意氣揚々と進んで行く。又多くの北米部族は出獵前に、彼等の探さうとする獲物に假裝して、その實際の獲物が捕へられるやうにその有樣を模擬する。例へば熊狩りの前に、狩獵者は時々熊に呼びかけて、怒つたり手向はないやうに、又は同情して體を提供してくれるやうに懇願する。殺してからは熊の精靈をあたかも人間か超人間かのやうに、なだめるのである。マレイのバワングは虎を非常に力ある偉大なるものと考へてゐる。例へばバワングは、

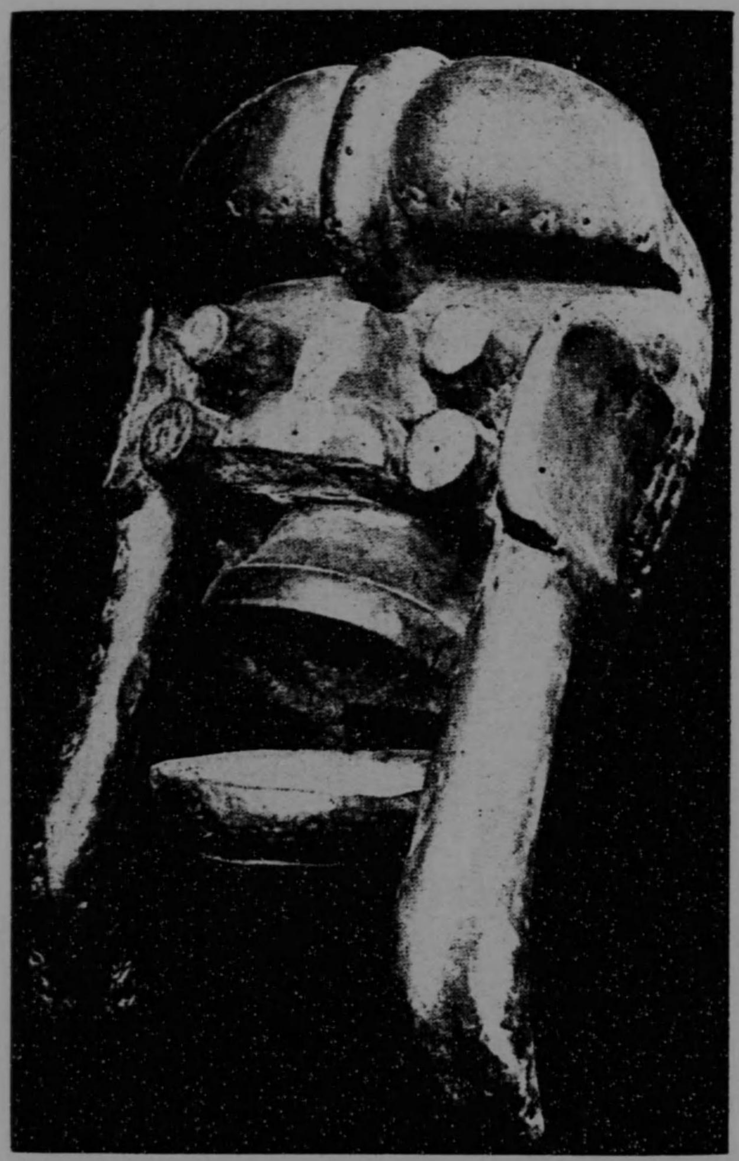
ホー、ガリ〳〵噛りや樣！
ホー、ぼり〳〵噛りや樣！
枝は野鷲の重みで折れてしまへ！
君主樣の御力（みちから）で、
お前の顎をとつと、締めつけ、
鎖でふん縛（じば）つてしまふぞ。
シャムの國から到來の、
この御祈りで牙と云ふ牙は、
どんな奴のも折つてしまふぞ。

と云ふやうな祈りをする。彼等はそれに依つて虎はもう口が開かなくなり、餌食を食ふ事が出來ないと考へてゐるのである。これと同性質の習俗は勿論漁撈に際しても適用される。

例へばトーレス・ストレイト諸島では、呪術的宗教的舞踊が、時々漁撈の幸を得る爲に催されたのである。女は龜獵の丸木舟に入つてはならないし、漁夫の仲間にも這入る事が出來ない。さうして彼等は藥草を燒いた煙で丸木舟を淨

め、その男達は鮫油と木炭の混合物で身體を塗り、出漁に際しては牛吼器（ブル・ローラー）を振り鳴らし、幾つもの呪像を舟上に載せ、その呪像の精靈を招いて乘組員の仲間に加はらしめたのである。バンフシャアの漁師は、鯡の季節が大變におくれた時は漁撈の幸をよくする爲に桶匠にふらんねるの下衣を着せ、之にいがを差し、手押車に乘せて町を行列したさうである。又、東部アングルの漁民の間には、彼等の死んだ仲間の靈魂は鷗に化生するといふ信仰があり、ブライトンでは、鯖の漁期に入つた最初の晩に、祝禱的儀式を行ふのが常である。

これ等の或ものは共感的であり、或るものは模擬的であり、象徴的である。呪術技法に依る多くの出獵前の呪術的宗教的舞踊乃至儀式的演戯の總てに於いて假面が使用されるのではない。然し屢々それに使用される事は事實である。例へばオーストラリアのトーレス海峡植民地の土人は、彼等の海上生活を富まし、鮫を釣針にかゝり易くする爲に、鋸鮫の奇妙な假面をつけて踊る（本項カット參照）。同じ目的に使用される魚の口孔を持つ假面がニュー・ブリテンにもある。尙本項の挿畫とした羚羊（かもしか）の如き、この假面はアフリカのイヴォリー・コーストから見出されたもので、それは黄色、黒、褐色の曲線に依つて構成された實に壯美なものである。是等の使用と儀式執行のうちに、自然、新しい觀念が創生されるであらう。それが次に説くトーテム假面と關聯してゐる。



第二項　トーテム假面

——Totem Masks.——

トーテムと云ふ語は北アメリカから由來するが、一種の社會宗教的組織としてのトーテミズム（トーテム制度）は、ひとり北アメリカのみでなく、オーストラリアにも、太平洋諸島にも多く、印度のドラヴィダ族及びアフリカのバンツゥ族の或るものゝうちにも見出されるものである。このトーテム制度の本質的徴相は、或る全クラン、或は他の一定の社會集團が、他の或るものゝ全種、或は屬——概して動物、又屢々植物、時には無生物——と結合して、「トーテム（Tetem）」とか、「アウグード（Augud）」とか、「コボング（Kobong）」とか、「ニアロング（Nyarong）」とか、

「シボコ(Siboko)」とか呼ばれる人間集團を構成するものである。このトーテミズムが彼等の有靈觀(アニミズム)にその根源を發する事は既に第一章第二項で論述したとほりであるが、これが制度として、如何に具體化されてゐるかを次にみなければならない。

私は第一章第二項に於いて、アメリカ部族の傳說に於いて、動物は世界創成及び人間的需要に應ずる適合物創製の作因であると信じられてゐる事、又、諸原始民族が、その個人の祖先は動物、植物、樹木から出たものと信じてゐる事等に就て述べた。こゝにトーテム動物乃至植物の發生始源がある。トムソン教授の所謂「生活網」の擴大の爲に、生物同志が連結し、相互を同一血屬と見做す信仰に基く目的は、それ等、動・植物等との關係をよりよく保持成長させる事に外ならない。こゝに、動・植物に關するフォーク・ロアに現はれる、生命の凡ゆる形態及び顯現の、本質的一致、相互變置の可能性、相互依存等に關する觀

念と、動・植物の超人間的力乃至智等に對する畏怖とに基く、功利的な宗教的社會的制度が生れる。卽ち例外はあるがこのトーテム制度の內容を概觀すると、先づ、

(a) それ等の人間集團とトーテムとの間には、呪術乃至宗教的な結合が存すると信じられてゐる。故にその集團の成員は、彼等のトーテムから加護を願ふと共にそれに對して尊敬を表する。其の尊敬の表現形式は多種多樣であるが、それが生物なら殺したり、又それが食用し得られるものなら、食ふことが禁せられる。なぜならば是等のトーテムとなる動物・植物は時に彼等の祖先であり、同一血屬であるからである。例へばフィジィ群島のヴィチ・レビュ島の土人は、彼等の幾代目かの曾祖は鰻であつた、と述べ立てる事が出來る。又バンクス諸島のモタ島では或る人々は人間であると同時に動物乃至植物であると、ほんたうに信じられてゐる。それは母が懷胎中、母體に宿つてゐた或る生き物、若しくは彼女の下着に落ち掛つた何等かの果實が與へた神祕的影響の結果であると云ふのである。それ故にそれ等の動物若しくは植物は殺してはならない。食つてはいけない。云ふ迄もなくそれは祖先への反逆であり、血で血を洗ふ事であり、同種相食（カンニバリズム）となるからである。尙其他のトーテム動物に對する土人の習俗信仰を知る爲に、フロイドが「トーテムとタブー」に於いて引用してゐる、ライナッハの十二個條よりなるトーテム法典概觀を拔萃してみよう。

「一、偶然死んだ動物は、種族の一員と同樣の榮譽を以て哀悼せられ、埋葬せられる。

二、食肉の禁止は、往々動物のある部分にのみ限定せられる。

三、若し必要止むを得ずして、平素愛惜する動物を殺さゞるを得ない場合には、彼等は種々の口實を設け、戒律の違反（卽ち殺すこと）の責を狡計や遁辭に依つて緩和しようと試みる。

四、動物が儀式に從つて"rituell"に供せられる場合は嚴かに葬られる。

五、宗教的儀式の如き特別に嚴肅な場合には、一定の動物の皮を着ることになつてゐる。トーテミズムの尙存在して居るところでは、この動物はトーテム動物である。

六、部族及各個人は其のトーテム動物の名を自己のものとして用ひる。

七、多くの部族は武器の蔽ひとして動物の繪を用ひ、尙、兵器をも動物の繪で裝飾する。部族の人々は其の身體に動物の繪を描き、或は刺青(いれずみ)する。

八、トーテムが恐るべく且つ危險な動物であつても、同一の名稱を有つ部族の人々に對しては危害を加へることなしと考へられてゐる。

九、トーテム動物はその部族に屬する人々を保護し、且つ警告を與へる。

十、トーテム動物は自己に忠實なるものには未來を豫言し、其の指導者として仕へる。」(吉岡永美氏譯)

等である。

こゝに於いて、一面の考察として私達は少し進んだ原始民族は生物の間に寄生的生活をしてゐたのでなく、彼等と動・植物との關係は相互扶助に依る共棲生活であつた事を了解し得る。卽ち彼等は單に或動物乃至或植物を自分達自身の爲に征服したばかりでなく、動物・植物を尊重してその種を保存し、且つ進化せしめる事に努力したのである。こゝに牧畜・植物栽培の起源をトーテミズムに求めるジェヴォンズ(An Introduction to History of Religion 參照)の理論の根源がある。

濠州のトーテム群のインチチウマ(Intichiuma)の儀式に於いては、トーテム動物を狩り、其肉を食ひ、其血を啜る事に依つて、祖先たるトーテム動物と、末裔たるトーテム群の成員とを再び結合させ、その關係をより深く親近せしめるのである。これが後世進化して肉の代りに麵麭、血の代りに葡萄酒が聖餐式に用ひられ、極東では米と酒とが用ひられるのだと云はれてゐる。

從つて斯くの如き性質を帶びるトーテム動物は世界に擴がり、今も尙各國に於いて何等かの形式に於いてこれを遺してゐる。例へばホーマー時代の希臘人は楯にその模樣を刻み、中世紀の騎士は「トーテム」を兜にまで向上させ、侯爵の書翰紙の頂飾をなす紋章的ライオンはニユー・ギニアからのトーテム假面と同系統であるとされる。日本に於いても直接の關係を有するか否かは不明であるが、人類學雜誌二八八號に山中笑氏の「本邦に於ける動物崇拜」があり、南方熊楠氏の「南方隨筆」にも同題の一章があつて考證されてゐる。南方氏の聚錄された動物名は、猿、熊、鼬、犬、狼、牛、野猪、海豚、梟、烏、鶴、鷺、鳩、燕、鶺鴒、鳶、蛇、海龜、蟾蜍、イハナ魚、鰻、鮫、蜜蜂、蝶、蟹、田螺等である。

(b)　次に祕密結社や兄弟の組織はトーテム動物から起る。血族でなくして加入と誓言に依つて統一された兄弟の緣は「トーテム・クラン」から生ずる。その成員加入の一例は(a)の濠州に於けるトーテム群のインチチウマの儀式執行のところで述べた。斯くして作られた集團の成員は、彼等自身其のトーテムと血屬關係を持ち、又は「異心同體」であると信じられてゐる。マブイアグの或男はハッドン博士に、「アウグードの者は皆同じ親類です。彼は同じ家族に屬します。」と語り、カンガルー・トーテム團のアルンタ人は自分の寫眞を眺めながら、「此の人は私と全く同じだ。カンガルーも其の通りだ。」と云つたとの事である。

(c)　こゝにまた、同じトーテムの者は相互に性的關係を結んではならない。從つて亦相互に結婚してはならない、と云ふ不文律がある。吾人はこれに對して彼等が相互に血屬關係を信じる以上それは當然すぎる事だと考へる。然しこれは事實上の骨肉不倫が往々生ずる呪はしき現象に對する誇張された恐怖から出て居り、同時に團體結婚に於ける骨肉の不倫に對する一の安全策であり、又若き人々に對する不倫の防止であると共に、老年者への阻止ともなる、と解する方が此場合むしろより正しい解釋のやうに思はれる。この禁斷はオーストラ

リヤの部族に於いて、最も嚴格であつて、その違反に對する常規の刑罰が死である事は珍らしくない。然しこのトーテミズムに基く異族結婚强制々度は、トーテム制度の本質的要素、或は顯著な樣相として數へられることは出來ないと云ふ說もある。なぜならば、ポリネシアのトーテムには、その禁止制度がなく、又それがトーテム制度から分離して獨立に存在してゐる國もあるからである。

以上の記述に依つて讀者は大略トーテミズムに就て了解されたであらう。そこで私はトーテム假面を紹介しなければならない。本項の挿畫として選んだ、この怪奇なゴリラの假面はイボリ・コーストから發見されたものである。法術師がこの假面をつけて踊つた時、或森の一族の精靈は營養を與へられたと信じられてゐたものである。豹族の誇りは彼等の假面のもとで話す事である。希臘人は彼等がデイオニサスを知る迄はトーテムを持つてゐた。さうして彼等の少女はテスピスが「まつばぼたん」で彼の顏を塗り、假面を發明する迄は、熊の假面をつけて踊つたものだと云はれてゐる。

アニマルの崇拜は演戲に終る。この起源が戲曲を產む、あたかも羚羊を神と考へるアフリカン・ネグロは舞踊を享樂する爲に假面舞踊を演ずる。水陸に人を住ませる爲に四十呎の「トーテム」の柱を彫刻し、彼の種族アニマルに就ての敍事詩の傳說を演ずるインデアンは一種の機械的細工の所有者である。バンクーバーからアラスカ迄の大平洋海岸に沿うて住むでゐる亞米利土人は往々日本の假面を想像させるやうな美しさを持つた木と銅からなる假面を作る。然し彼等の特徵とする型は糸と蝶番に依つて作用される機械的頭布にある。その假面と操人形は英領コロンビアの Kwakiutl インデアンス の持つ鯨を思はせるやうな假面と似てゐる。この假面は鯨(?)の全身を假面に仕立てたもので、舞踊者の頭はその中が空虛になつてゐる長さ四呎半もある木彫の中に隱される。さうして一方、彼の手はその鯨の鰭や尾や口を動かすやうに仕掛けてある絲を忙しく

操るのである。このやうな機械的仕掛に依る奇蹟を際限なく占有したインデアンの歸依者は、今では古代のトーテミック傳説の絲を失ひつゝあるとの事である。

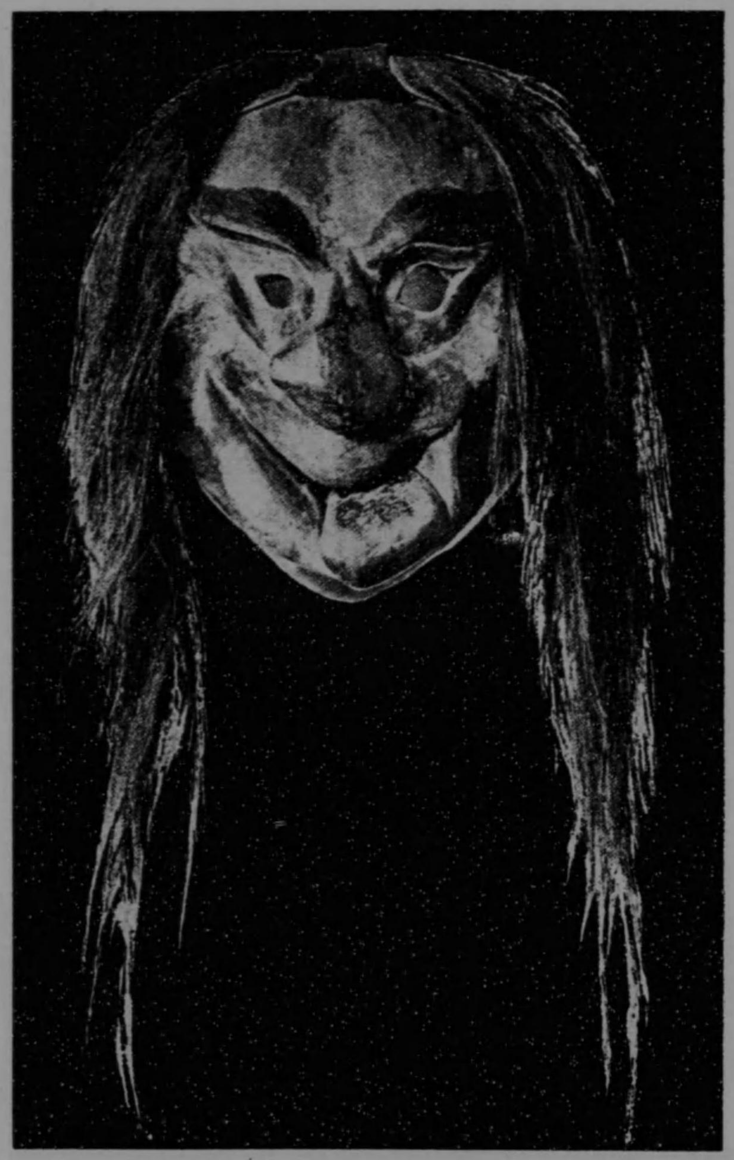
尚、私達はトーテム動物と共に、神に化生した動物の存在を忘れてはならない。古代エヂプトに於いて、動物に化生した神々を見出す(本項カット參照)コンゴー産の蟻食獸(アント・ビーア)假面は普通の「トーテム假面」ではない。その假面の左の耳には太陽があり、右の耳には目がある。尚、鳥類の持つ飛翔力と囀聲力に對する崇拜や、地上と天上との間の傳達者としての、又は火の將來者、魂の將來者、赤兒の將來者としての信仰等に基いて、これがトーテム假面乃至神化動物假面を創る事を忘れてはならない。

以上は主として狹義に於けるトーテム假面に就て紹介したのであるが、このトーテム動物は原始的民俗假面の各種にわたつて、その姿を現はしてゐるものである。それ等に就ては以下の第五項追悼假面、第七項靈的假面、第十二項其他の假面、等の各項を參照していたゞきたい。

第三項　妖魔假面

——Demon Masks.——

人間を食ふ獸類、有毒な草木、毒蛇、有害な昆蟲、等々の群り棲息する熱帶の樹木鬱蒼たる森林は、天然の無數の妖魔の巢窟である。アフリカには藪林があるが、その藪林を妖魔に對する防備なしに通過する事は、人間の生命が尊むべきものであるよりもより以上に重大な事であるとされてゐる。ここに假面の製作が要求される(本項カット參照)。なぜならば容貌を假裝する事は、名前を變へる事よりも、もつとよく相手の裏をかき、效を奏するからである。又、形態、色彩、等の持つ內在的呪力は、非常に抑制し難い精神に對して、總ての舞



踊、聖詞、聖歌よりも、時にはもつと有效であると信じられてゐるからである。然し俗人にとつて、この無數の惡靈に含む特殊な惡魔の個性なり、その偏見なりを知る事は非常に困難である。從つてそれを專ら司る人の必要がおのづから起る。卽ちこゝに熟練せるその醫師（メヂシン・マン）や方術師（シアマン）が、その博學と久しい經驗を積んで現はれて來るのである（第四項參照）。コンゴーにはこの呪術が一種の職業と化した時に用ひられた惡靈退散用の假面がある。それは鬘（かつら）附の木彫假面で、その鬘は三角形のナポレオン帽を思はせる。長い眉毛と眼は一線を引いたやうに細く、容貌も溫厚であるが、その白い額と顳顬（こめかみ）の上に魔法用のやゝ隆起した朱色の短形があつて、それは組模樣のやうに彫りつけられてゐる。土人はその假面を附け、一組のよく似合ふ網目の裝具を身に纏ひ、食物と賽錢の供物を集める袋をさげた子供を伴うて、大膽にも惡魔退散の爲に國中を遍歷するのである。

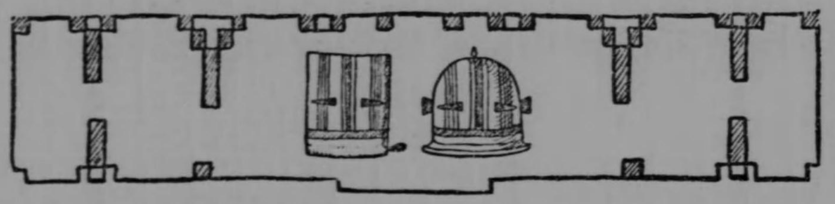
メラネシアに於ける妖魔は思ひ切つて大膽で、彼等は森を出て來て、土人の

家をおのれの住家とした。これ等の惡魔が饑飢、地震、流行病、其他の災害に依つておのれ自身の存在を知らす時、土人はその個人の仕事をなげうつて、共同してこれに對する。かうした時、いつも尻ごみするブッシュ人(濠州の森林居住者)のゐるオーストラリアに於いて、多くの場合彼等土人は、赤色や黄色で隈取り、又は彼等自身の身體を白く塗ると、それ等の妖魔と戰ふ事が出來、その魔力を充分に防ぎ得ると考へてゐる。然しシーレベスでは假面が重要視されてゐて、土人は附けられるだけは假面を附け、殘りの者は生來の素面をより黑くする爲に顔料を顔に塗る。さうした第一の戰闘準備が終ると、彼等は村から少し離れた所へ彼等の所持品を移して幾日かを其處に過し、槍、刀、棍棒等をたづさへて武裝を整へ、元の住家を襲ふ。さうして土人は彼等が惡魔の退散に依つて喜び得るまで、その妖魔を打つのである。ニュー・ギニアの Papuans 土人はもつと組織的である。彼等は惡靈退散の年中行事は村を清める源であると考へてゐる。彼等は木彫の假面をつけて精靈の爲に踊るのである。彼等は豚や甘薯の魂を彼等に饗宴する。さうして鷄が路傍の食卓にならべられ、家柱(House-posts)を打つことに依つて、彼等を太鼓で町の外へ追ひ出すのである。

この妖魔(デモン)はまた必ずしも熱帶地方の特産物ではない。北アメリカや歐羅巴諸國にも住んでゐるばかりでなく、北極地方をも困らせたものである。ポイント・バアローのエスキモー人は Tuna と稱する有害な靈に依つて非常に苦しめられた。バッフイン・ランドのエスキモーは地獄の女神セドナに依つて非常に苦しめられた。大氷山の轟然たる破壞の響や海風の長い唸り聲が、一種の幽氣の叫びとなつて海から襲ひ來る時、彼等土人はどんなに激しい恐怖を感じた事であらう。然し大平洋海岸の土人から假面の使用を會得したエスキモーは、ただ西部の或る一族のみである。ずつと南のバンクバー島の土人間からは、瞬きもしない錫の眼と、大きな唇の厚いグロテスクな口を持つ木彫の假面が見出される。

これは大平洋の外に西風を一掃させるものであらうと云はれてゐる。又、アラスカの極西に住む Aleuts 土人は神を怖れて、神の眼前で踊る人々の眼を假面で蔽ふ。これは眼に多くの魔力があるといふ信仰(例へば、シンハリーズでは、石か土塊で出來た偶像に眼が點ぜられると一つの「神」となると考へられて居り、或男達の氣息や瞥視に依つて女を姙娠させることが出來ると信じられてゐる如きもの)の一變形に基くものであらう。

特殊な妖魔は Iroquois 土人をよく苦しめた。こゝに Ga-go-ge——模擬假面が發生する(第四項中の類似的呪術考參照)。彼等妖魔は精靈であつた爲に、腕、肢、身體等を持つてはゐなかつた。その寂しい場所で、樹から樹へ飛んでゐるやうに見える幽鬼は、恐ろしい容貌を持つ首だけのものだつた。彼等はあらゆる疾病をふりまいて人々を苦しめた。土人はこの幽鬼を追ひ拂ふ爲に模擬假面組(False Face Company)と稱する祕密結社を組織した。この成員が用ひる假面はその幽鬼を模寫したもので、三日月型の鼻と、せゝら笑ひにゆがむだ、怖ろしく突き出た口とを持つてゐて、顏は眞赤に塗られてゐる。土人はこれをつけて、ぼろぼろの獸皮を身に着け、海龜の介殼をがら〳〵振りながら、村中を馳けまはつて幽鬼退散の呪法を行ふのである。本項の挿畫として選んだこの假面はセカネの模擬假面祕密結社にある一つで、この種のもので特に面白く出來てゐるものである。



第四項　醫術假面

——Medichine Masks.——

原始的民族の總てが呪術を重用する事に就ては既に述べた。然し私は第三項等の參照の爲に、更に一歩を進めて呪術技法を專門に行ふ方術師(シャマン)(Shaman)、醫師(メヂシン・マン)(Medichine-man)、妖巫(ウイッチ)師(Witch)、等の位置、仕事、その施術方法、等に對する考察を、本項の初めに大略述べて置かねばならない。

呪術師の持つ力は、時には遺傳的、卽ち生れつきで、殊に、醫療的、卜占的、豫言的の力の場合はさうである。然し總て巧妙なる呪術性能と力は、往々多少の艱苦を伴ふ數年の修業や試錬を行ひ、或者は老錬な師の傳授を受け、入社式を經て初めて得

るものである。北部シベリアのブリアート族間に於いて、その新參者の訓練を果す爲に行はれるシャマン新入の神聖な儀式は、極めて念入りなものである。（詳細バーンの「民俗學概論」參照）

是等の呪術師のうちには、普通、方術師（シャマン）（或は占術師）、醫師（メヂシン・マン）、妖巫師（ウイッチ）、等と呼ばれるものがあり、尙外に妖巫發見師（ウイッチ・ファインダー）、白巫術師（ホワイト・ウイッチ）等々がある。シャマンの位置と仕事に就ては、マレイのパワングが、「人間と精靈との間に於ける承認された仲介者であつて、……彼無しには如何なる村落社會も完きを得ないであらう。」とよき定義を下してゐる。事實シャマンは公私一切の重大時機に際して、その職務の遂行を要求される。卽ち彼は疾病を驅逐し、收穫を饒かにし、狩獵季を上首尾にする爲に儀式を執行するのである。從つて是等の者を司祭者と稱していゝのか、呪術師の範疇にのみ限つていゝのか、明瞭に區別し得ない場合が多い。醫師（メヂシン・マン）とシャマンとの區別も往々その境界を判然と分ち難い。然し主

として醫師（メヂシン・マン）の職務は、その文字が示す如く、呪術に基く非科學的、原始的民間醫術を行ふものである。妖巫師（ウイッチ）は東西を問はず、常に社會の敵であつて、他の妖巫師と黨を結んで純粹な惡意から惡業を働くものである。妖巫發見師（ウイッチ・ファインダー）はこれ等の惡業の妖巫師を退散せしめるものである、白巫術師（ホワイト・ウイッチ）もまた同じ目的から生れたもので、「白」と云ふ名稱は、「白」の呪術が、惡魔的な「黑」の呪術に優ると云ふ迷信に基くものである。では是等一切の呪術師が如何なる施術方法を行ふかを、次に考察しなければならない。

施術方法の考察に際して、先づ呪術師の力の源泉を考査大別すると、物質的物體の仲介に基くものと、精靈への奉仕に依るものとの二種類がある。卽ち前者はアフリカ等の呪術師に屬するもので、彼等はそれを取扱ひ、醫用する。卽ち其靈的乃至呪的力を賦與する物質的物體を仲介としてこれを行ふ。後者はアジア等の呪術師に屬するもので、彼等はむしろ、彼に憑依し、彼と交通し、且彼に奉仕を强ひられた精靈の直接行爲に依つてこれを行ふものである。さてその呪術技法には共感的原理の迷信利用に基くものと、物眞似的（mimic）或は「模倣的」（imitative）呪術として知られてゐるものとの、二種類がある。

この共感的原理に基くものは、各國の日常生活に關する普通の呪術的行事の大部分の根柢を成すもので、それには二つの形態がある。その第一のものは、分離部分と本體との內に共感がありと迷信されてゐる繼續的共感に依るものである。例へば我國に於いて、想ひを聽き入れてくれない戀する女の頭髮を手に入れて、自分の頭髮に結びつけておくと、その女は七日間のうちになびくと信じられてゐる如きものである。第二のものは曾て接觸したことのある、そして今は分離してゐる二人の人間、或は物體間に、共感が存在すると云ふ迷信に基くものである。例へば夫の出征中に妻が他人と密通すれば、夫は殺され傷付けられると思はれ、疣腫は豆莢や肉片で擦ると、莢や肉の樣に消え失せると考へ

られてゐる如きものである。

物眞似的、模倣的呪術として知られてゐるものにも二つの形態がある。第一のものは「類似は類似を生む」と云ふ迷信である。例へば心臟の表象物を貫くと、戀人や敵の心臟を射る事が出來ると思はれてゐる。第二のものは「類似は類似を治療す」と云ふ迷信である。第三項の模擬假面もこれに起源するものであらう。たゞ、かうした共感的乃至類似的呪法が行はれる場合、呪術師は惡靈退散の目的の爲に、惡靈よりもより卓越した呪力を常に顯示して敵を克服する事が必要である。こゝに、形態、色彩、其他の持つ内在的呪術性能の應用に依るあらゆる施術技巧が工夫される。又、疾病治療の場合は病人の代りに病魔の棲家を新しく用意してやらねばならない事もある。ブルマでは、妖魔を騷音でおどかして家内から退散させる。然し假面は憑依せんとする惡靈を嚇かす噪音よりも、もつと重要視されてゐる。例へば、支那では癩瘡（はしか）の病魔退散の爲に、小さな子

供達は日沒時に特殊な紙製の假面を附ける。アリゾナ等の Navaho 醫師（メヂシン・マン）は、その施術の一助手として、病魔退散の戰ひに於いて若き軍神 Tobadiststini を使ふが、その精靈は朱皮の頭巾袋のやうなものに、白色の魔法用の飾結びや模樣のつけられた假面に體現する。この醫師は遊歷する爲にその假面の代用として輕便なヘルメット風の又は袋樣の假面を持つてゐる（本項カット參照）。然しセイロン島では病氣治療の爲には假面を打ちのめせばいゝとされてゐる。其處には公の藥處方として十九箇の假面が、十九種の病魔の爲に用意されてゐる。醫師（メヂシン・マン）がこれを適宜に使用するのである。卽ち彼が醫療呪法を行はうとする時には、先づ病室に祭壇を設けて、それに直面して立ち、花や食物を祭壇に飾り供へ、假面をつけて、さておもむろに病氣を起した妖魔に適ふやう假裝踊を踊るのである。病魔に適ふやうに、病魔仲間を思はせる假裝をして、面白く踊るのは、病魔を病人の身から誘ひ出して、新しく用意した病魔の住家、卽ち醫師（メヂシン・マン）の身

へ移らせる爲である。この假面舞踊は日沒と眞晝と曉の前後三回に亙つて繰返される。それが終ると呪術師は村端れまで出てゆき、其處でしばらく假死の狀態に陷る事に依つて、病人や町と同樣に身に憑いた妖魔を取除くのである。本項の挿畫に選んだ假面はそのうちの癩病魔のものである。尙、この施術に際して、若し十九の妖魔假面を示しても、尙診斷に疑ひのある場合には、もう一つの大きな假面を出してみせる。またこの惡魔舞踊は惡魔の侵入の爲に、病人の身からぬけ出た精靈を喚び戻す爲にも併用される。卽ち醫師は、囃子方を伴ひ、(この囃子をやる土人は、細長いビール樽のやうな太鼓を横水平に吊し、その兩面を兩手で左右から打つて囃すのである。)傳習的な樣式で、歌ひ且つ踊りながら、精靈を搜し歩くのである。これに用ひられる假面は往々巨大怪奇な角狀のものや、頭布角(コブラ)(毒蛇の角瘤より出づ)を持ち、赤味を帶びた猿に似た風貌と、瞬きしないどんぐり眼と、大きな白い齒と牙等を持つのが普通で、この病魔假面舞踊はボルネオでも行はれてゐる。ただ、前者と異るのは、醫師(Dayong)は總て頭上に鷹等の羽毛を澤山にたてる事である(これは地獄エルリックへ墜ちてゐる病人の靈を醫師が鷹と化して捕へて來ると云ふ說話に基くのではないかと思ふ)。その爲に假面に角又はコブラがなく、たま〳〵角を持つものは、耳の附根から生じてゐる。その代りに假面の多くは長い頤髯を持つてゐる。又、醫師は全身を蓑(みの)のやうな裳でつゝむ。彼等は一群をなして惡靈退散の靈旅を企て、グロテスクな圓形舞踊を演じて病人の精靈を喚び戻すのである。精靈が招喚された時、呪術師は魔法の腕栅(うでかせ)を病人の腕に結ぶ。これはせつかく捕へた精靈が再び飛び去らないまじなひである。

第五項　追悼假面

——Memorial Masks.——

前述の如く呪術に重要視されてゐる假面でさへ、病人を醫癒し得ない場合がある。この靈魂と肉體との分離として考へられる死が、彼等原始的民族のうちに來るとき、死後に於ける靈魂とその生活との性質に關する彼等の信仰に基いて、樣々な儀式と習俗が生れる。その主なるものを大別すると、一つは亡靈祓除を目的とするものであり、他方は亡靈崇拜に基く追悼的なものである。

ニュー・アイルランドに於いては、死人の追悼會は六月に全部同時に行はれる。この季節に於いて、最東に位するビスマルク

群島の土人は祕密結社の指導の許に集り、死人に象つて彫刻された假面をつけて之を行ふのである。是等の假面は死人の精靈復歸の體現を示すものである。其處には彼等の美術的自由性を進化させて、至善を表現し得たと信じられてゐる神聖な追悼假面の一つがある。假面の面容は隈取られ、頂にのみ飾髪を持つギリシャ人のヘルメットや、ハワイの羽のヘルメットを想はせる冠鬚を附けてゐる。その頭部の兩側は削りそられ、頂にのみある飾髪は追悼會の踊子の髪の毛を象徴したもので、石灰で白くされ、黄色く染められて居り、削られた頭の兩側には、石やキラ〳〵とするものが裝飾の爲に塗り附けられてゐる。またそのうちにはトーテムポール（トーテムの信仰に基く傳說等を彫刻した柱）を想はせるやうな、高さ二呎に及ぶ假面の幾つかゞある（本項挿畫參照）。土人の婦女子などは、その赤と白と空色からなる表象的な撚り組まれた木柱に、又は明るい綠色の瞳を持つかたつむりの貝殻のきらめくその眼に、白と褐色とオレンヂ色の木棉で

出來た髪の毛に、取りわけ、頂に止つてゐる我が血屬を示す象徴的なトーテム鳥のうちに、死人のおもかげを偲び、それが踊る時、その精靈の復歸をなつかしむで、彼の名を叫び、悲歎の聲を洩らすのである。勿論、これ等の假面の頂を飾るトーテム・アニマルは、死んだ個人の守護神としてのトーテム・アニマルであつて、それが殆んど鳥類なのは毒々しい蛇や蜥蜴にも優る力を持つと云ふ信仰に基くものである。從つてかうした鳥を表徴する假面には往々、同じ高さの翼などを附けて飾られてゐるものもある(本項カット參照)。次に之等の追念の儀式が如何にして行はれるかを、より詳細に知る爲に、バーンが「民俗學概論」で引用したブルの聖島での追念儀式の事を紹介しよう。

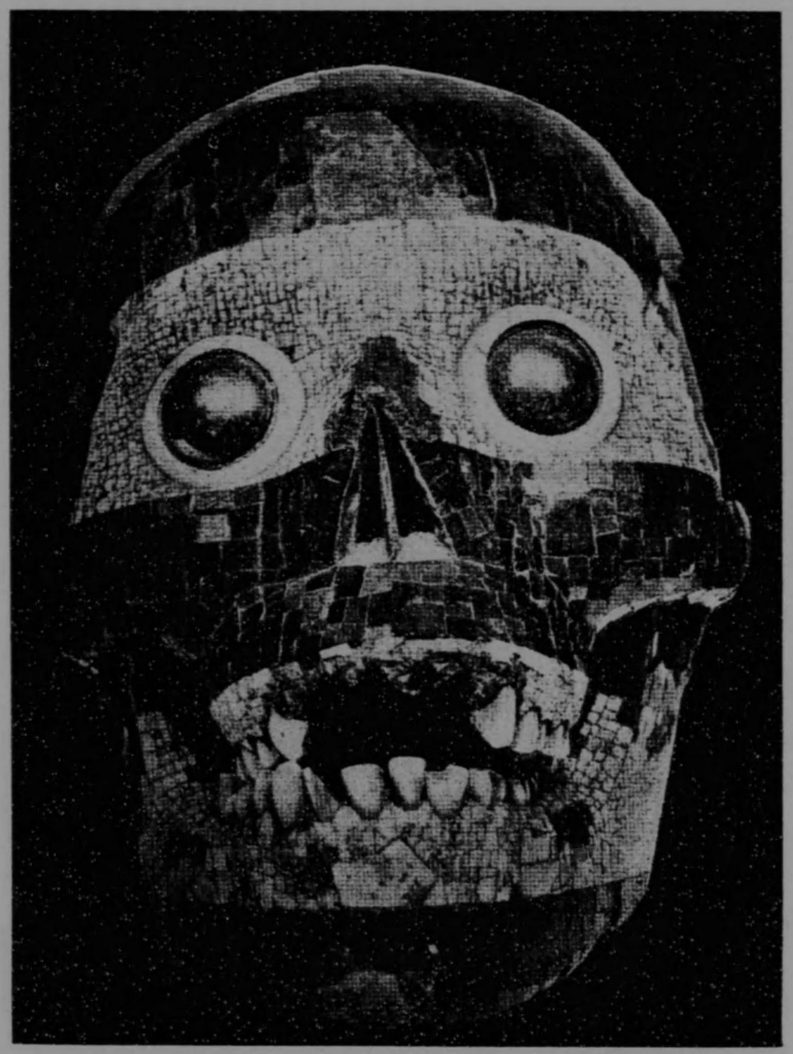
「時々一般的葬禮が西方海岸を遠く沖に離れたブルの聖島で催された。そこには共同社會の聖寶が藏されてあり、且少年はこゝで『大人にされた』。成年式の直前に於いて前の會合後に死んだ人々を追念して『死の踊り』が演ぜられた。最近

何人かの葬式に於て、マリゲット(筆者註——これはマブイアグ族——トーレス・ストレート——の葬ひの諸慣習のうちで、その時の葬儀に於ける總ての準備を進める委員として、公式に定められた義兄弟に對する名稱である。彼マリゲットは追悼の儀式を行ひ、舞踊を踊り、儀式の終りの行列に於いては、身を黒く彩り、樹の葉で作つた假面で頭を蔽ふ。)として働いた人々は、踊りを司宰するのが常であつた。女と少年とは葉面(リーフ・マスク)(Markaikuik)を作つてゐる大人を見ることを禁じられてゐた。筵の大幕が、準備の整へられた會場の周圍に張り廻はされた。假面假裝の踊手(勿論彼等はすべて男性である)は、男性亡靈(Marki)と女性亡靈(Ipika-markai)、及び一人の道化者とを裝ふ。男女の人物は共に黒く彩色し、男役は、箒を持つた二人を除いては、皆弓失を持つた。彼等は張りめぐらされた天幕から三人宛で出場し、男の二人は女(女裝した男)を彼等の間に挾み、死んだ友人の動作や身振りを眞似ながら觀者の前で踊つた。それで少しく離れて坐つてゐる死者の緣者の者でも、故人の代理者をそれと見分けることが

出來た。最後の組は箒を持つて出場する。その後から道化者が、腰から椰子の實をぶらさげて出て來て、はねたり、つまづいたり、滑稽を演じて緊張を弛めるのであつた。女と子供とは、演者等は實際、彼等を訪れて來た死んだ友人の亡靈であると信じ、且死者は尙生存してゐるといふことを確めて、自ら慰めてゐるやうに思はれるのである。」（岡正雄氏譯）

死に對する恐怖、その穢れに對する畏怖の存在も一般的事實であつて、その心理を捕へた者達は、屢々暗黒な大陸を惡魔で蔽ひ、香具師的な不法の利得をむさぼるものである。死人をもたらす仕事は西部アフリカの主なる生業の一つである。彼等はそれを行つて、生あるものから不法の課稅を取立てるのである。その施術に際しても假面はしば〳〵用ひられる。又、これ等の死に關する假面のうちには、オーガスタ・リヴアの流域から發見されたものや、アラスカや北極に注ぐユーコンの上流にある僻村ミユウカ等に今も尙殘つてゐる死の假面（デッド・マスク）とし

て作られたものもある。それは禁忌（タブー）として崇拜されながら靈所（ゴースト・ハウス）に納められてゐるのが常である。



第六項　頭蓋假面

——Skull Masks.——

死人の頭蓋は、云ふまでもなく生殘者にとつて、非常に意味深いものである。ニュー・ギニアやオーストラリヤのトーレス・ストレートの諸島では、死人の頭蓋は自體から離され、ニュー・イングランドに於ける柩銘（Coffin-plate）のやうに家に保存される。この習俗はベンガル灣の東部のアンダマン諸島の人々の間にもあつて、彼等は近親者の死を追悼する遺品として、その頭蓋の上部に色彩をほどこしたものを保存してゐる。ニュー・ブリテンの近くの島の土人は、さうした頭蓋を模寫した假面を作る事に依つて、この考へを魔法の結末にまで推し進める。亡く

なつた呪術師や長であつた戰士の精靈やその力は、そのやうにして保存されるのである。また婦人や子供の頭蓋假面も屢々作られる。その鼻は粘土でこしらへられ、それに髮の毛や色彩が附け加へられる。これ等の假面は年二回、月光の輝く晩に人々に依つて附けられ、踊られるのであるが、その時、演者は頭蓋假面の耳から耳へ渡された棒を喞へて、その假面を顏につけるのである。メキシコ往古のアズテク人(Aztecs)も同じやうな習俗をもつてゐたもので、本項の挿畫假面は、西班牙の征服者が四世紀前のメキシコから持つて歸つたものゝ一つである。アズテク人のこの木製の頭蓋假面はトルコ玉で象眼された寄木細工(モザイク)の精巧なものである。その眼は黃銅鑛で、裏に革紐を通す爲の穴が附いてゐる。本項のカットのものもその一種である。

第七項　靈的假面

——Spiritual Masks.——

唯心論（スピリチユアリズム）は凡ての原始人の假面製作を統治する。これを知らなければ、樹木に精靈を見出したり、死人から善意の行爲を求めたりする彼等土人を理解する事が出來ない。このあらゆる神靈が假面にも再現すると云ふ唯心論的心情に基いて假面を作る原始人は、私達の科學的教養の狹さを嘲笑するかのやうに、唯心論的（スピリチユアリステイツク）假面（マスク）の領土が如何に廣大なものであるかを私達に示す。其處には私達の想像も及ばないやうな、實に不思議な、象徴的な、色々の假面がある。

その一つにニュー・ヘブライドから發見された四方四面に顔

を持つ靈的假面がある。この假面は泥土と樹皮布（bark cloth）で作られてゐるが、その四方四面の各々の顏は逆立つて頰に密接せる二つの牙を持ち、各々の前額には同じく逆立つた大きな角を持ち、その頭頂は四方から集中されて尖んがつてゐる。この假面は東印度の或るろしま神（天の門番なりと稱されてゐる兩面の神）か、或ひは戰に於ける Hydra（ギリシャ神話中に現はれて來る九頭の怪物）としての恐ろしい酋長の靈か、そのいづれかを體現させたものであらう。

假面はそれ自身が象徴である。ネグロはそれを感じてゐる。彼は頭それ自身のうちに、或る神祕な內在性を感じる。彼は假面の製作に際して、單なる表面的象徴を描いたり彫刻したりしない。皮や樹皮の着物をつけて働いてゐるメラネシャ人は、どんな事があつても單に意味深長を現はす爲にのみ裝飾しない。彼が木彫をしてゐる時でさへ象徴のための感情が彼を追掛ける。彼はその色彩のほどこされた着物に對して趣旨を加へると同じ總ての意志表示をもつて彼の

靈的假面を裝飾するのである。かうした象徴的な靈的假面の一例として、この挿畫に選んだやうなニュー・ブリテンからの屹立せる假面がある。それは「葉の顏（フェース・オブ・リーヴス）」から、頭飾へかけて七呎もの廣さのあるもので、象徴されたものは鳥のやうでもあり、蝙蝠傘のやうでもある。おそらくそれはトーテムであらうが、頂上の小さな彫刻から、最後の翼の繪模様まで、製作者自身も看破する事の出來ないやうな象徴的心醉のうちに出來上つたものである。

原始人はまた、その初期に於いては全然神のうちにあつた。彼等は死んだ有力な僧上と、生きてゐる有力な僧上との間に殆んどその區別をつけないのである。從つて若し或る靈的假面が、踊つてゐる人々に附けられる代りに、偶像に附けられるとしたら、それに光明が點ぜられ、望ましき光明が與へられると信じるのである。こゝにメキシコ・印度等に見出される偶像假面（アイドール・マスク）の起源がある（本文カット參照）。例へばアズテク人の王が病氣にかゝつた時、王が亡くなるか、全快するまでは神の偶像に假面が附けられた。これは一般公衆の災禍の時にも同じであつた。

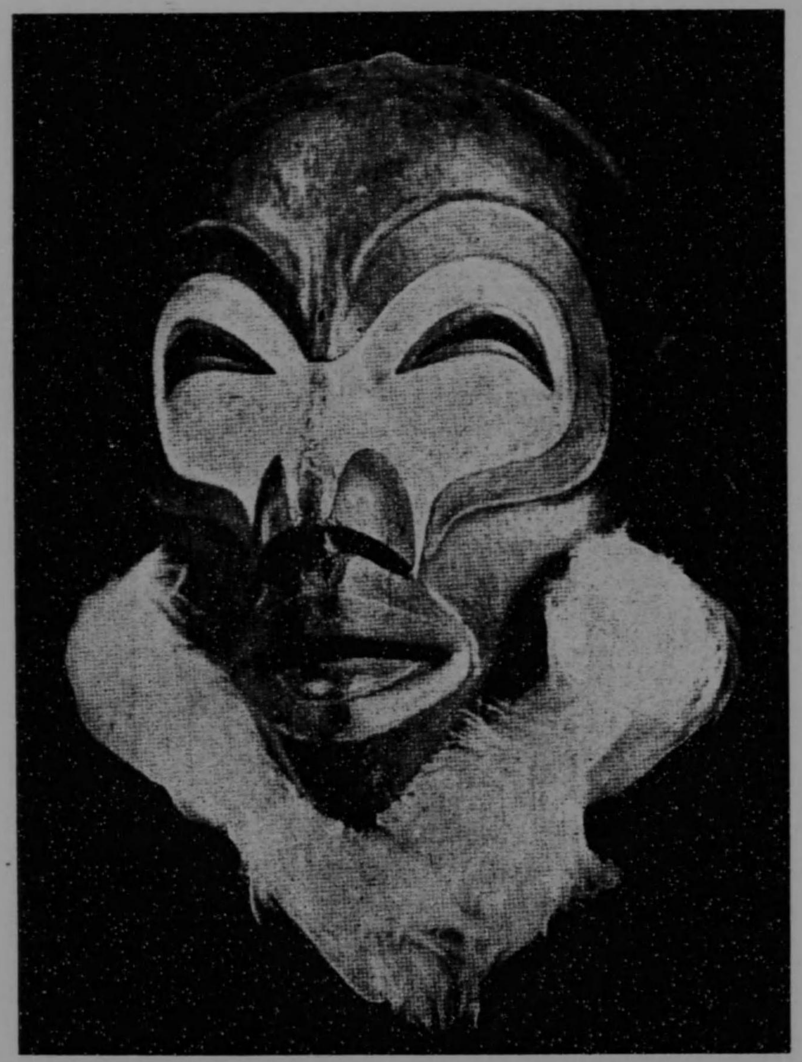
尙、奇妙な愛嬌に富んだ、卜占假面（デヴアイン・マスク）など云ふものもある事を附言しておく。

第八項　戰爭假面

——War Masks.——

巧妙な學說が戰爭をして假面の先祖を護らしめてゐる。皮や樹の楯を顏前にかざしてゐる戰士は、敵の一擧一動を見る爲に、その楯に眼をつける事を考へた。次に彼等はその楯を頭上に結びつけ、遮眼革（めかくし）を附けたまゝ、肉迫戰を演ずる方が、もつと便利であると考へた。然し假面の發生起源には、かうした實用的理由以外に、もつと根强い信仰的理由が含むでゐる。

原始土人が楯に彼等の常に崇拜し畏怖するトーテム動物を描き、兜にそれをいたゞき、又、超人間的な怪奇な戰爭假面を作るのは、單に敵を驚かせるばかりでなく、むしろ、それ等の楯



や兜や假面に、超人間的な力を體現させ、それを自ら身につける事によつて、その超人間的な力を自體に體得し得ると信じたからである。ニュー・ブリテンで、今は亡き勇猛な酋長の頭面が作られるのも、この信仰に基くもので、曾て彼等の仇敵をさんざんに苦しめ戰慄させた酋長の力を、假面に復活せしめる事に依つて、再び彼等の仇敵を周章狼狽せしめようとする目的に外ならない。

これ等の假面は又多くの軍事的舞踊に使用される。軍事的舞踊は彼等戰士の統一、綜合、團結を目的とする團體訓練の爲に、且つ彼等全軍の士氣を鼓舞する爲に、同時に、戰勝を神に祈り謝し、敵を威嚇する爲に、最も重要なるものであつた事は事實である。然しその目的は單にそればかりではない。彼等土人は人間の意志は、呪歌を謠ひ、呪術的身振りを行ふ事に依つて、直接にその周圍のものに働きかけ得ると信じてゐたのである。こゝに萬象に具有すると考へられてゐる内在の呪力、又は種々の事を引起す隱れた神祕力——こゝでは主と

して、聲音、言葉、身振、動作、形態、色彩等――に對する利用がある。卽ち彼等が謠ひ、踊るのは、オマハ人の所謂「支配力を送る（Wazin-dhedhe）」の爲の意志的行爲である。それは他人の力を補足する爲に、又相手を降伏せしめる爲に人がその思想や意志力を、他人に向けて發送し、以て相手の行爲を左右する爲に行はれるものである。この信仰は同時に彼等の所持する楯や劍や、身につける假面の精靈的人物（原始的民族間の呪術的行爲に於ける人と云ふ語は、名前、影、人像、肖像、等すべてその人自身の積分的、若しくは實體的諸部分として包攝するところの人格と云ふ擴大された概念を持つてゐる。）の上にも利用される筈である。例へば彼等が若し槍を敵に目がけて投げつけ、それが相手にあたつて敵が倒れたとしても、彼等はその結果を武器の機械的作用と見做さないでむしろ彼が槍の狙をつける際の自己の意志や、努力や言葉そのものが、その結果をもたらしたと信じるのである。卽ちこの場合槍そのものは一種の固有なるもので、彼が意志を注入した一個の人格的存在として考へられる。換言すれば、彼等のオレンダが、その敵のオレンダよりも強かつたから之に打勝つたのである。故に若し敵が其處に居合さないでも、彼等が明かにその敵に近づき得ない場合でも、彼等のオレンダは所期の傷害を充分に與へ得ると信じられてゐるものである。その爲に、また、このオレンダをより強大にする爲に、彼等は常に前述のやうな信仰から軍事的舞踊を演ずるのである。

本項の挿畫に選んだこの假面は、英領コロンビヤの土人の饗宴に重用される、今は儀式道具と化した四つの軍事的假面の一つで、赤、白、黑の假面の一つなるその顏の半面は、高慢な酋長が價値ある財產の幾つかを燒いた時、非常に高い熱に依つて燒かれたと信じられてゐるものである。

第九項　入會假面

——Initiation Masks——

こゝで云ふ入會假面とは、北アメリカ、西アフリカ、ポリネシア、メラネシア等の未開種族が構成してゐる秘密結社へ、新入者が加入する時、その入社式に用ひられる假面と、多くの野蠻民族に於いて、その子弟が幼年期から成年期へ移る際に、公に執行する成年式に用ひられる假面とを、總稱するものである。故に私達は先づ「秘密結社」なるものに就いて、又は「成年式」なるものに就いて知らねばならない。

この秘密結社は文字通り、女、子供及び他所者等に對して猜疑深く隱蔽した（ビスマーク群島のドック・ドック秘密結社の團員

は、若しその秘密を洩らせばその刑罰は死である。）社會自身の祕密を具有するものである。この祕せられたものは、時に共同社會の安寧を保つ爲の呪具であることもあれば、又、祕密の神話或は呪術的宗教的儀式であることもある。この祕事を知り、それを守護するものは、時に全成年男子團である事もあれば、時にはそのうちの戰士團とか司祭團とか、成年者中の最內團員とかのみに限られてゐる事もある。ともあれ、この結社の主たる職能は、公衆秩序の守護である。卽ち西部アフリカの結社は「犯罪人を罰し、土人警察の如くに行動し、借金を收集し、私有財産を保護し、且つその職能の廣汎なる所にては、部族間の親交を維持する」ものと考へられ、またドック・ドック結社は「裁判官、警察官、及び絞刑吏を凡べて一つに具したもの」と云はれてゐるものである。

成年式は主として男子に適用されるもので、（勿論、少女に對する成女式なるものもないのではない。それは結婚への序幕とも云ふべきもので、少女は一人

前になると、この成女式のもとに閉居させられ、その儀式では婚姻生活に於ける知識を授けられる。然し男子ほど重要視されてゐない。)その主なる様相は、從來女や子供の間で無拘束に送つて來た少年の生活から完全に離れたこと、及び或る期間、遠隔の地又は限られた地域に、多少の肉體的苦痛に耐えて閉ぢ籠る事等である。この入社式の段階を經て、少年は完全なる大人にされ、成年者の特權を享受し、且成年者に課せられた規則に服するものである。この成年儀式は精粗、緩嚴、種々樣々であるが、通常、

(一)、斷食、食物の禁忌、强制的沈默、恐怖苦痛の抑制、身に加へられる一切に對する無抵抗的服從、といふが如き忍從と自制の試練を目的とするもの、

(二)、割禮(陽皮環狀切開)、若しくは拔齒、等の如き肉體上の手術、

(三)、操行、特に民族的若しくは部族的婚姻規制(トーテム假面考參照)に關する敎授、

(四)、部族傳承を藏し且保存するところの祕傳的劇的舞踊、

等を包含するものである。是等の行事は大部分女に祕せられ、同じく隱蔽されてゐる聖物の開帳がある。又時には、擬死と蘇生とが行事の一部を成して居ることもある。この成年式に於ける嚴格さは、勢ひ年長者の權力を强大にし、且つそれ故にその社會の制度を固化するに至ることも明かである。

さて以上の準備知識を得た後に、私達は各國の民族について、入會假面を伴ふそれ等の儀式を見なければならない。ニュー・ギニアの成年式では、新入少年はその儀式に關する特殊な假面と衣裳をつけて、奇怪な變裝を擬らされた小屋である所の鯨の口のやうな怪物の口の中へ歩いて行かされる。母親や姉妹達はそれを眺めながら、怪物が子供達を吐き出してくれるまで悲歎を續ける。又或時は、本項の插畫のやうな妖魔に會つて語る爲に、森の奥へ連れて行かれる。然し少年達は、さうした怪物は神靈に依つて暫時生氣を入れられたものである

が、結局は人間の細工であり、妖魔は假面をつけた人間である事を知るのである。同時にこの祕密を婦人や子供に絶體に洩らさない事を彼等の先輩に誓ふのである。さうした試鍊の後に澤山の傳說が話され、聖歌を授けられ、共に謠ひ踊るのである。トーレス・ストレートの成年式は先づ假面舞踊に初まる。初めに新入少年達の前に三人の舞踊者が聖所から現はれる。第一の者は骨組を白く塗つた擊劍の面を奇怪にしたやうな假面をつけてゐる。第二の素面の者がこれを網で捕へてゐる。鱶を象徵させたやうな假面をつけた第三者がこれに從ふ。彼等は少年達の中央まで來ると、ぐる〳〵まはりながら踊るのであるが、舞踏は膝を非常に高くあげるもので、各々のステップの間に長いポーズがある。舞踏が終ると彼等はまたもとの聖所に歸つてゆく。その後に少年達は先輩から一族の聖歌、傳說を習得し、精靈を假裝した戰につれられ、襲擊の試鍊をうける。それは往々慘酷な負傷をさへ與へられるものである。南西部の他のインディアンに比較してアバッシュ人は神や傳說を少しゝか持つてゐない。然し儀式に參加する呪術師や踊子は舞踊や身振所作（パントマイム）に伴ふ五十の歌を知り、その歌を適當な順序に覺えなければならない。又、プエブロ・インディアンの八方神に對照して地球を四分して守るものであるが、その一つの神靈假面は時として成女式に際して現はれる。

英領コロンビアのクッアキユッルト・インディアンの持つハマッア祕密結社の守護神は偉大なる人肉を食ふ怪物である。その木彫の假面は我能狂言「蚊相撲」に出て來る蚊の假面をもつとグロテスクにしたやうなものである。入會の候補者はその偉大なる人食妖魔に出遇ひ、歌や儀式を習ふ爲に森の中へゆく。こゝでもニュー・ギニアの少年が祕密結社の鯨の家に入るやうに、大鴉の口の中へ入る。是等はいづれも擬死と蘇生を現はすものである。前述のドック・ドック祕密

結社では、新月の時、翌朝海岸に巨大な火食鳥の形をしたドック・ドック結社員とその妻との奇怪な形像が漂着すると、貢物の強請と未入社人に苦痛なる神判を加へられる豫徴であるとされる。このドック・トック結社の踊子は普通、細長く高い（その高さ五呎に及ぶものあり）頂飾のある三角形の假面（それに白線で眼・鼻が描かれる）をつけ、草で作つた下着（ガアメント）をつけてゐる。彼等が若し島中を踊り歩くと、病人は恩恵を受けると考へられてゐる。

以上は野蠻族に於いて、その子弟が幼年期から成年期へ移る際に公に執行する成年式に於いて、主として青年の度胸等を試練する假面を紹介したのであるが、これ等の祕密結社はこれ以外にも、その用途に應じて用ひられる種々の假面を持つてゐる。卽ち、彼等仲間の品性を高め、幼年者婦女子を敎導する爲にも、恐怖と神祕の宿る假面、卽ち敎戒假面（Disciplinary Masks）を用ひ、彼等の神話、傳說を物語る靈的假面を用ひ、コンゴーの或る所では彼等の職務の一つなる裁判に於いても假面を用ひるのである。

第十項　雨乞假面

——Rain-Making Masks.——

プエブロ・インデアンの如き低級文化の宗教儀式に於いては、「呪術」が「宗教」に、「宗教」が「呪術」に、如何に徐々と渾融して了ふかを見出すであらう。彼等の神はカトリック教の聖徒のやうであるが、時に彼等の儀式はカトリック教の祭典を惡化し、時に彼等の儀式はカトリック教の祭典に依つて惡化されるのである。プエブロ・インデアンの宗教の大部分は人間と、偉大なる靈——卽ち藍色の大空の如く顯著なるズーニー族の Heslie と、彼の雨の造物主との間を取りなす祖先の神に依つて行はれる象徴的な傳說である。こゝに採用した長い藍色の角を持つ黑白の

假面は、北部の雨の聖徒 Siatasha を象徴したものである。ズーニー族の呪師コーコスは、この假面をつけて降雨を祈る爲に、象徴的な動作や、對話や、操り人形のやうな身振りをしながら、行進し、謠ひ踊り、終に喜歌劇や普通演劇まで含むやうな儀式を演ずるのである。

このプエブロ・インディアンの持つ假面は幾度も種々な儀式に用ひられる。それ等の假面は皮で作られてゐるので、儀式に應じて神や女神に象る爲に、毎年塗りかへられ、新に描かれるのである。假面の樣相は頭を全部蔽うてゐるものもあれば、圓屋根のやうなヘルメットを持つものもあり、木綿頭巾を持つものもある。外に鬚の用ひられるものも多い。たゞ異樣な事は、若し假面が髯を持つてゐたら、それは女神を表徴すると云ふ事である。之等の假面はあらゆる儀式に出現するもので、從つて雨の踊りに參加する Hopi の中にも見出されるものである。本項のカットもその雨乞假裝の一種である。

第十一項　謝肉祭假面

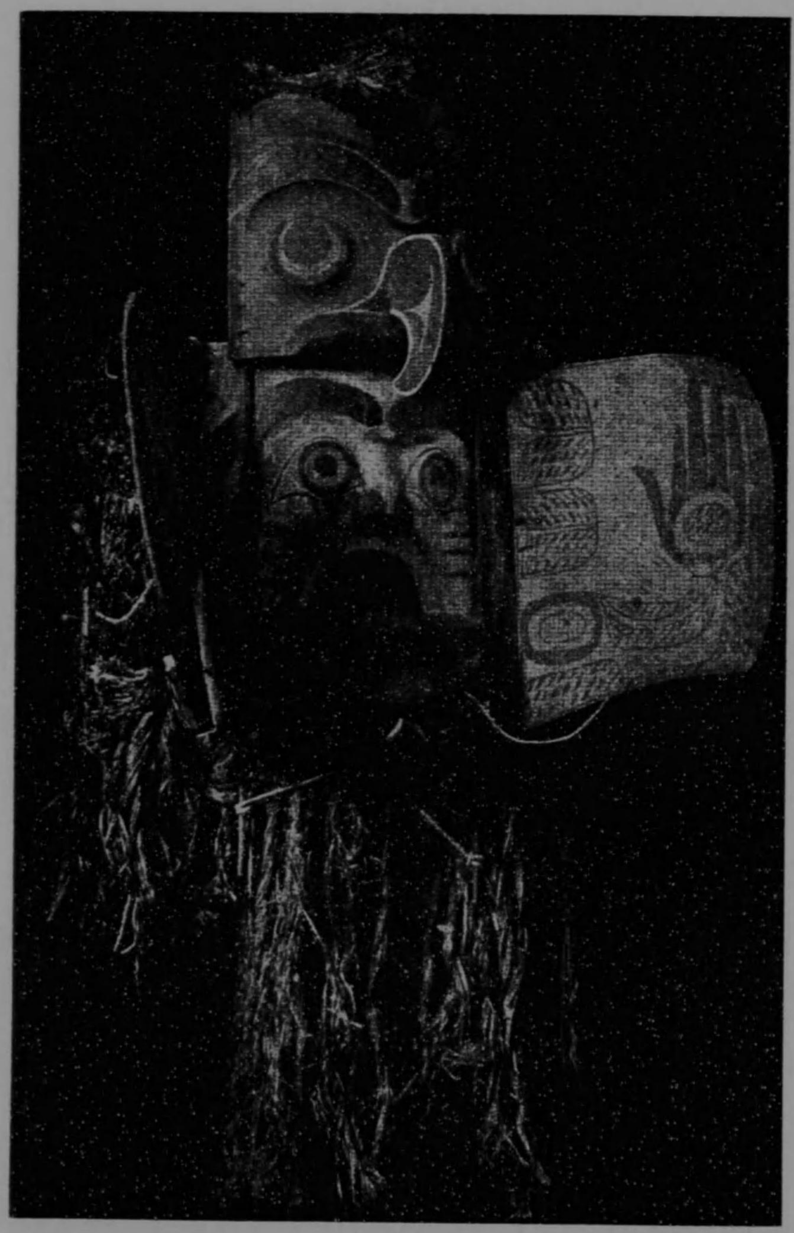
——Carnival Masks.——

假面は二十世紀餘の間に、歐羅巴諸國に於ける謝肉祭で身をもちくづした。私はそのうちから比較的原始的な瑞西の農夫等が用ひたものを紹介したい。

マッターホーンとヨオングフラウの間に半分づゝかゝつて居る Lötschental の小さい峽谷に於いて、瑞西の農夫は假面の全歷史を通じて私達に思ひ起させるやうな底拔騷ぎをやつた。彼等は假面の保護にかくれて子供を怖がらせ、近所のものを奪ひ、邪神を追放し、自然を富ます爲に盛んな饗宴を催した。四旬齋の三日前に煙突は掃除され邪神は退散する。戸は閉ざされ、た

だ熟慮する人々のみがこはごは出てみる。彼等の衣服を裏返して、特殊な法衣をつけ、人間や動物や邪神の假面をつけた未婚者は、村中を馳けずりまはる。彼等は通行人を灰の入つた袋で打ちながら、それを塗りつける。彼等は牡牛のやうに怒號し、家の中へ亂入し、少女達を脅す。本項の挿畫はさうした時に用ひられる一種で、アルプス山麓やオブェラメルガウの十哩以内の所では、今も尙、農夫はこのやうな假面をつけるのである。

墺國チロルの Pinzgau と Pongau の謝肉祭では、鳥の嘴と鹿の角を持つた珍らしい假面が現はれる。その假面は Perchten を現はしたものである。今はすたれたが、之等の十二の邪神はクリスマスから十二日目の前の晩からの最初の日曜日に、人間のやうな獸のやうな惡魔や、すべての種類の怪物の假面をつけて村を通る五六十人の若者の中にまじつて現はれる。彼等は鞭や牛の尾でたゝきながら、道路で亂暴狼藉をする。尙生殖生産のまじなひに女を陰莖形の鞭で打つ。



第十二項　其他の假面

以上の諸項目に於いて、私は原始的民俗假面の殆んど總てに亙つて記述し得たと思ふが、本項に於いては以上の各項目に洩らしたもの、或は其他のものに就て、補充、附記したいと思ふ。

先づ其初めに北部太平洋海岸の土人が持つトーテム假面乃至その變形とも云ふべきものに就て紹介したい。農夫を幽閉し、活動させない寒風吹きすさむ北部の冬は、北部太平洋海岸のエスキモー達をして、木彫假面や傳說の脚色に依つて構成された非常に夢幻的な芝居へ向はしめる。夏は彼等に取つて非常に樂しいポートラッチ（北米印度人種族等の饗宴）の時である。彼等

はそこで御自慢の獨特の身振を演じる。冬の初めに、彼等の秘密結社が入社式を行ふ前、その一族は長い戯曲的連續からなる傳說を細說する。バンクーバーからアリゥシャン群島に至る迄の北米印度人やエスキモーは、我能面を粗雜にしたやうなDsonquaとか「黑男」と稱される假面を彫刻し、色どり、使用する。かうした日本の面によく似た假面はアジアに近く擴がつてゐる群島のエスキモーに依つて使用される。トーテムに常に豐富な北方の種族は、長い冬の籠居に於ける幻想に依つて、世界の何處にも見出されない精練な原始的假面とその用法を作り出したのである。

北太平洋の豐穰な河川は、土人に安定し得る住居を與へ、他の種族が狩獵に專心してゐる間に、農業國民の生活にまでその文化を向上せしめ得たのである。その結果はトーテミックな傳說や精巧な劇的儀式や、複雜な假面の用法を、非常に澤山創作せしめてゐる。北部太平洋の印度人（インディアン）はトーテム動物は二つの形相

を具有するものだと考へ、その一つの形相は動物自身の形であり、他の一つは神又は人間の形をしてゐるものと信じてゐる。だから彼等は常に神や人間や動物や、その混合物のやうな種々樣々の假面を作る。本項の挿畫に選んだものも、その一つであるが、これはたゞのトーテム假面ではない。この黑い翼が假面につけられた仕掛絲で閉ぢられる時、外界は夜である。その翼が開け擴げられる時、赤い嘴を有する太陽が現はれる。又、他の紐を引くと、太陽の顏の裏から、人間の顏が現はれるやうに、鐵杖を傳つて太陽の假面が上にせり上るやうに工夫されてゐる。この日の出の假面の頭に羽毛の附いてゐるのは霧を象徵したものである。

偉大なる靈は鳥の形をして地球に飛來し、そこで人間と化生した……最も原始的な人間はかうした傳說を第一の儀式で諳つた。第二期はそれを人間や假面に依つて戲曲化した。英領コロンビアにもさうしたものに使用された假面があ

る。その外形（アウトサイド）は大きな圓い形をしてゐるが、これはおそらく畫かれ彫刻された神の頭の象徵であらう。紐仕掛に依つて其假面が半分に開かれると、鳥の假面が現はれる。それがまた開かれる。第三に人間の顏が現はれる。彼等は常にかうして古い傳說を戲曲化し、新しい演劇としてそれを舞臺に演出するのである。

狩獵を事とする野蠻人は、その食物としての動物を魔法の祭典に依つて增加する爲に、動物假面を作るが、農業を事とする未開人は雨のことばかり考へてゐる。こゝにズーニー人の作つた特殊な雨乞假面がある。それは皮袋のやうに作られ、その表面の顏の所には二つの眼と口とのある黑い手が描かれ、耳として花模樣のやうなものが描かれてゐる。土人に依るとそれは前者は星座を現はし、後者は痲醉性の雜草花を象徵したとの事である。

こゝにまた希臘の酒神ディオニソスを連想させる假面のいくつかゞある。その一つに多分地中海の未開の、然も表現技巧に富んだ農夫の作であらうと思惟

される假面がある。その假面の顔は收穫物の纖維を編むで作つたもので、髮の毛も葡萄の葉である。アメリカの或る地方の土人は、私達に希臘の演劇や他の演劇の起源を思ひ起させるやうな假面を持つてゐた。その面相は幾分は百姓じみ、幾分は邪神じみ、尙幾分は土の神を思はせる。それは毎秋、植物が枯れる事に直面して、彼等植物に勇氣を與へる爲に作られた、多産の表象的假面である。オーストラリアの或る地方では豐作を祈る爲に、夜間野に出でゝ男女の祕戲を實演して、良い實(みの)りを天に願ふが、西南インデアンは生産力の象徵としての陰形假面を持つてゐる。その儀式は道化た所作で演せられるのが常である。

尙、原始的假面としてはこの外に特殊な木乃伊(ミイラ)假面(Mummy Masks)と稱されるもの等があるが、以上の考察をもつて一先づ筆をおく。

後記—參考書に就いて

私はこの著作の第一章の各項目の後に、可成多くの參考原書を列記してゐるが、數冊を除いて、その全部を讀破したわけではない。これは篤學な讀者及び私の今後の研究の便宜の爲にあげたもので、こんな事で衒學者振ると思はれるのも殘念だから先づ明記しておく。

この著作で基本的參考書ともなつたものは左の諸書である。卽ち、

1. "Masks and Demons" by K. Macgowan & Rosse.
2. "Customs of the World" Edited by W. Hutchinson.
3. "Handbook to the Ethnographical Collections"
4. "The Handbook of Folk-Lore" by C. S. Burne.

5. 右邦譯「民俗學概論」岡正雄譯
6. "Wendingen" June-July, 1920.

等である。然し第一のマックゴウワンの著作は、挿畫の臺本等には非常に便利であつたが、假面に對する民俗學的研究が充分でなかつた爲に、第一章にあげた二三の原書及び次の諸書等を參照しなければならなかつた。

1. 「人類學汎論」西村眞次著
2. フロイド著「トーテムとタブー」吉岡永美譯
3. ハートランド著「原始民族の宗教と呪術」中井龍瑞譯
4. ハッドン著「呪法と呪物崇拜」植木謙英譯
5. "Dramas & Dramatic Dances" by Ridgeway.

等である。その外に人類學、民俗學に關する雜誌もあるが、これは略する。

最後に末筆ながら、前記ハッチンソンの "Customs of the World" 等を貸し與へられた明石染人氏と、この著作の出版を紹介して下すつた小寺融吉氏との厚情を、こゝに附記して深謝の意を表す。

後記―參考書に就いて

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月二十日發行

原始民俗假置考

定價金壹圓五拾錢

著者　南江二郎
　東京市神田區南神保町十四番地
發行者　富永薰
　東京市神田區錦町三丁目十七番地
印刷者　白井赫太郎

精興社印刷所印刷

發行所
東京市神田區南神保町十四番地
地平社書房
振替東京六六一九四番
電話九段二六〇二番

民俗藝術叢書刊行の言葉

民俗學が、他の學問から獨立したのは、さう古いことではありません。西歐に於ても、僅々半世紀を遡り得るに過ぎないのであります。然るに、今や此學問はかなりの隆盛を極めるやうになりました。民俗學の主眼とするところは、從來の、人類學・考古學のやうに、單に物質方面の探究に基礎を置かず、それらの事物を發生せしめた民族の精神生活を闡明するにあると言つていゝでありませう。それを探る方法としては、古く書き殘された書物に據るの外、或は神事として、或は藝能となり、乃至は民間のしきたり風習となつて殘つてゐるものに就いて、これを分析し考證して行くのが其一つだと思ひます。恐らくは、雜誌『民俗藝術』の刊行せられる目的が、やはりそこにあるのだと信じます。私共は、過去一年有半、此雜誌によつて學び得たことの實に甚大であつたを喜ぶと同時に、更に一歩を進めたものが欲しくなりました。かくして此叢書は計畫せられたのであります。民俗藝術そのものに就いての研究は勿論、それと關係ある凡ゆる問題に亘つて網羅しました。いづれも、各自の專門的見解になる深淵な研究、或はそれを學び行く爲のリーダーとなるものであることを確信いたします。

昭和四年六月

民俗藝術叢書

各冊四六判 紙裝堅牢

柳田國男著 **民謠の今と昔** 價壹圓 送六錢

小寺融吉著 **藝術としての神樂の研究** 價壹圓 送六錢

中山太郎著 **祭禮と風俗** 價壹圓 送六錢

南江二郎著 **原始民俗假面考** 價壹圓半 送六錢

——以下續刊——

月刊學術雜誌

民俗藝術

昭和三年一月創刊

我國固有の神事・信仰の民俗學的開明　（民俗藝術の會編輯）

本誌は毎號各大學の教授其他專問大家執筆のもとに各地に殘存する古劇・古舞踊・民謠・特殊の神事・年中行事・民俗的造型美術等の各方面に亘つて豊富なる寫眞・挿画と共に紹介する本邦唯一の研究誌であります。蓋我國固有の眞精神はこの新しい試みによつてはじめて其眞面目を闡明する事が出來ると言ひ得られませう。大方の御購讀をお薦めする次第であります。（内容要目　郵券二錢同封御申込次第送呈）

定價一册五十錢（送料一錢五厘）　六册三圓（送料共）　十二册六圓（送料共）

民俗藝術合本

第一卷　上册　自昭和三年一月至六月　第一卷總目次附　定價　金四圓

第一卷　下册　自昭和三年七月至十二月　第一卷索引附　定價　金四圓

送料　一册分・市内（十二錢）　内地（二十七錢）　其他（五十五錢）

二册分・市内（十二錢）　内地（四十五錢）　其他（七十五錢）

社本地

598
11